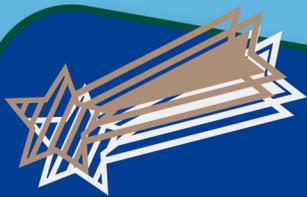


ほんとうの幸い



銀河鉄道の夜

宮沢賢治
大活字本
シリーズ

①

みやざわけんじ
宮沢賢治

銀河鉄道の夜／グスコブドリの伝記

三和書籍



みやざわ けんじ
宮沢賢治

宮沢賢治大活字本シリーズ

①

銀河鉄道の
夜の

銀河鉄道の夜／グスコーブドリの伝記

三和書籍

【凡例】

- ・ 本書に収載の「銀河鉄道の夜」の底本は、角川文庫『銀河鉄道の夜』、「グスコープドリの伝記」は、岩波文庫『童話集風の又三郎』である。
- ・ 文字データは、青空文庫作成の文字データを使用した。
- ・ 文字遣いは、そのデータによる。
- ・ ルビは、データのものに加えて、本文、目次を総ルビとした。
- ・ 文字遣いには、格段の基準は設けていない。

銀河鉄道ぎんがてつどうの夜よる

1

グスコーブドリの伝記でんき

181

銀河鉄道の夜

一 午後の授業

「ではみなさんは、そういうふうにかわ川だと言われたり、乳の流れたあとだと言われたりしていた、このぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか」先生は、黒板につるした大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問いをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四、五人手をあげました。ジヨバン二も手をあげようとして、急いでそ

のままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちがあるのです。

ところが先生は早くもそれを見つけたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか」
ジョバンニは勢いよく立ちあがりましたが、立ってみるともうはつきりとそれを答えることができなかったのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすつとわらいました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ

赤かになつてしまいました。先生せんせいがまた言いいました。

「おほ大きな望遠鏡ぼうえんきんきうで銀河ぎんがをよつく調しじべると銀河ぎんがはだいたい何なんでしょう」

やっぱり星ほしだとジヨバンニは思おもいましたが、こんどもすぐに答こたえることができませんでした。

先生せんせいはしばらく困こまつたようすでしたが、眼めをカムパネルラの方ほうへ向むけて、

「ではカムパネルラさん」と名指なざしました。

するとあんなに元氣げんきに手てをあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立たち上あがったままやはり答こたえができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじっとカムパネルラを見て
いましたが、急いで、

「では、よし」と言いながら、自分で星図を指しました。
「このぼんやりと白い銀河を大きな望遠鏡で見ます
と、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジヨバンニ
さんそうでしょう」

ジヨバンニはまっ赤になってうなずきました。けれども
いつかジヨバンニの眼のなかには涙がいつぱいになりました
た。そうだ僕は知っていたのだ、もちろんカムパネルラも
知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士
のうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかに

あったのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を
読むと、すぐお父さんの書齋から巨きな本をもってきて、
ぎんがというところをひろげ、まっ黒な頁いっぱい白に
点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。
それをカムパネルラが忘れるはずもなかったのに、すぐに
返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午後にも
仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ば
ず、カムパネルラともあんまり物を言わないようになった
ので、カムパネルラがそれを知ってきのどくがってわざと
返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じ
ぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

先生はまた言いました。

「ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるなら、もっと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと言いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮かんでいるのです。つまりは私も天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてその天の川の水のなかから四方を見ると、

ちようど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集まって見え、したがって白くぼんやり見えるのです。この模型をござらなさい」
先生は中にたくさん光る砂のつぶのはいった大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちようどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立ってこのレンズの中を見まわすとしてござらなさい。こつちの方はレンズが薄いのでわずかの

光る粒すなわち星しか見えないでしょう。こっちやこっちの方はガラスが厚いので、光る粒すなわち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるという、これがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれくらいあるか、またその中のさまざまな星についてはもう時間ですから、この次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭りなのですから、みなさんは外へでてよくそらをごらんください。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい」

そして教室じゅうはしばらく机の蓋をあけたりしめたり本を重ねたりする音がいつぱいでしたが、まもなくみんな

はきちんと立^たって礼^{れい}をす^ると教室^{きょうしつ}を出^でました。

二
活版所

ジヨバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七、八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木のところを集まっています。それはこんやの星祭りに青いあかりをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジヨバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたり、ひのきの枝にあかりを

つけたり、いろいろしたくをしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲がってある大きな活版所には行って靴をぬいで上がりますと、突き当たりの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついて、たくさんの輪転機がばたりばたりとまわり、きれで頭をしばったりラムプシエードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いておりました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子にすわった人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね」と言いながら、一枚の紙切れを渡しました。ジヨバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函をとりだして向こうの電燈のたぐさんついた、たてかけてある壁の隅の所へしゃがみ込むと、小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次へと拾いはじめました。青い胸あてをした人がジヨバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う」と言いますと、近くの四人の五人の人たちが声もたてずこっちも向かずに冷たくわらいました。

ジヨバンニは何べんも眼をぬぐいながら活字をだんだん

ひろいました。

六時ろくじがうってしばらくたつたころ、ジヨバンニは拾ひろった活字かつじをいっばいに入いれた平ひらたい箱はこをもういちど手てにもった紙かみきれと引ひき合あわせてから、さっきの卓子テーブルの人ひとへ持もつて来きました。その人ひとは黙だまってそれを受うけ取とつてかすかにうなずきました。

ジヨバンニはおじぎをするとと扉とびらをあけて計算台けいさんだいのところこに来きました。すると白服しろふくを着きた人ひとがやっばりだまって小ちいさな銀貨ぎんかを一ひとつジヨバンニに渡わたしました。ジヨバンニはにわかかに顔かおいろがよくなって威勢いせいよくおじぎをするとと、台だいの下したに置おいた鞆かばんをもつておもてへ飛とびだしました。それから元げん

気きよく口くちぶえ笛ふを吹ふきながら。パン屋やへ寄よって。パンの塊かたまりを一つと
角砂糖かくざとうを一袋ひとふくろ買かいますといちもくさんに走はしりだしました。

三 家いえ

ジヨバンニが勢いきおいよく帰かえって来たのは、ある裏町うらまちの小ちいさな家いえでした。その三みつつならんだ入口いりぐちのいちばん左側ひだりがわには空箱あきばこに紫むらなまきいろのケールやアス。パラガスが植うえてあつて小ちいさな二ふたつの窓まどには日覆ひおおいがありたままになつていました。

「お母かあさん、いま帰かえったよ。ぐあい悪わるくなかつたの」ジヨバンニは靴くつをぬぎながら言いいました。

「ああ、ジヨバンニ、お仕事しごとがひどかつたろう。今日きょうは涼すずしくてね。わたしはずうつとぐあいがいいよ」

「ジョバンニは玄関げんかんを上あがって行いきますとジョバンニのお母かあさんがすぐ入口いりぐちの室へやに白しろい巾きれをかぶって寝やすんでいたのです。ジョバンニは窓まどをあけました。」

「お母かあさん、今日きょうは角砂糖かくざとうを買かって来たよ。牛乳ぎゅうにゅうに入いれてあげようと思おもって」

「ああ、お前まえさきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから」

「お母かあさん。姉ねえさんはいつ帰かえったの」

「ああ、三時さんじころ帰かえったよ。みんなそこらをしてくれてね」

「お母かあさんの牛乳ぎゅうにゅうは来きていないんだらうか」

「来こなかつたらうかねえ」

「ぼく行ってとって来よう」

「ああ、あたしはゆっくりでいいんだからお前さきにお
あがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて
行ったよ」

「ではぼくたべよう」

ジヨバンニは窓のところからトマトの皿をとって。パンと
いっしょにしばらくむしゃむしゃたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつとまもなく帰って
くると思うよ」

「ああ、あたしもそう思う。けれどもおまえはどうして
そう思うの」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁はたいへんよ
かったと書いてあったよ」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれ
ない」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へはいるようなそ
んな悪いことをしたはずがないんだ。この前お父さんが
持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかいの
角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授
業のとき先生がかわるがわる教室へ持って行くよ」

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてく
るといったねえ」

「みんながぼくにあうとそれを言うよ。ひやかすように言うんだ」

「おまえに悪口を言うの」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して言わない。カムパネルラはみんながそんなことを言うときはきのどくそうにしているよ」

「カムパネルラのお父さんとうちのお父さんとは、ちょっとおまえたちのように小さいときからのお友達だったぞうだよ」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。ぼく

は学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合わせるとまるくなつてそれに電柱や信号標もついていて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油をつかったら、缶がすっかりすすけたよ」

「そつかねえ」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家じゅうまだしいんとしているからな」

「早いからねえ」

「ザウエルという犬がいるよ。しっぽがまるで箒のようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうっと町の角までついてくる。もっとついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだって。きつと犬もついて行くよ」

「そうだ。今晚は銀河のお祭りだねえ」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ」

「ああ行っておいで。川へははいらないでね」

「ああぼく岸から見ただけなんだ。一時間で帰ってくるよ」

「よ」

「もっと遊んでおいで。カムパネルラさんといっしょな

ら心配しんぱいはないから」

「ああきつといっしょだよ。お母かあさん、窓まどをしめておこ
うか」

「ああ、どうか。もう涼すずしいからね」

ジョバンニは立たって窓まどをしめ、お皿おひらやパンの袋ふくろをかたづ
けると勢いきほいよく靴くつをはいて、

「では一時間半いちじかんはんで帰かえってくるよ」と言いいながら暗くらい戸口とぐち
を出でました。

四 ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口つきで、檜のまっ黒にならんだ町の坂をおりて来たのでした。坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光って立っていました。ジョバンニが、どんどん電燈の方へおりて行きますと、いままでばけもののように、長くぼんやり、うしろへ引いていたジョバンニの影ぼうしは、だんだん濃く黒くはつきりなって、足をあげたり手を振ったり、ジョバンニの横の方へまわって来るのでした。

(ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越す。そうら、こんどはぼくの影法師はコンパスだ。あんなにくるつとまわって、前の方へ来た)

とジョバンニが思いながら、大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新しいえりのとがったシャツを着て、電燈の向こう側の暗い小路から出て来て、ひらつとジョバンニとすれちがいました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの」「ジョバンニがまだそう言ってしまったわないうちに、

「ジョバンニ、お父さんから、ラッコの上着が来るよ」

その子が投げつけるようにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ぱっと胸がつめたくなり、そこらじゅうきいんと鳴るように思いました。

「なんだい、ザネリ」とジョバンニは高く叫び返しましたが、もうザネリは向こうのひばの植わった家の中へは行っていました。

（ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを言うのだろう。走るときはまるで鼠のようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを言うのはザネリがばかなからだ）

ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、

さまざまの灯あかりや木の枝えだで、すっかりきれいに飾かざられた街まちを
通とおって行いきました。時計屋とけいやの店みせには明あかるくネオン燈とうがつい
て、一秒びようごとに石いしでこさえたふくろうの赤あかい眼めが、くるっ
くるっとうごいたり、いろいろな宝ほう石せきが海うみのような色いろをし
た厚あつい硝子ガラスの盤ばんに載のって、星ほしのようにゆっくり循めぐったり、
また向むこう側がわから、銅どうの人馬じんばがゆっくりこっちへまわって
来きたりするのです。そのまん中なかにまるい黒くろい星座せいざ早見はやみが
青あおいアス。パラガスの葉はで飾かざってありました。
ジョバンニはわれを忘わすれて、その星座せいざの図ずに見み入いりまし
た。

それはひる学校がっこうで見たあみの図ずよりはちいさかつた

のですが、その日と時間に合わせて盤をまわすと、そのと
き出ているそらがそのまま楕円形のなかにめぐってあらわ
れるようになっており、やはりそのまん中には上から下へ
かけて銀河がぼうとけむったような帯になって、その下の
方ではかすかに爆発して湯げでもあげているように見える
のでした。またそのうしろには三本の脚のついた小さな
望遠鏡が黄いろに光って立っていましたし、いちばんうし
ろの壁には空じゆうの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形
に書いた大きな図がかかっています。ほんとうにこんな
ような蠍だの勇士だのそらにぎっしりいるだろうか、ああ
ぼくはその中をどこまでも歩いてみたいと思ったりして

しばらくぼんやり立たっていました。

それからにわかにお母かあさんの牛乳ぎゅうにゅうのことを思いだして
ジヨバンニはその店みせをはなれました。

そしてきゆうくつな上着うわぎの肩かたを気きにしながら、それでも
わざと胸むねを張はって大おおきく手てを振ふって町まちを通とおって行いきまし
た。

空くう気きは澄すみきつて、まるで水みずのように通とおりや店みせの中なかを流なが
れましたし、街燈がいとうはみなまっ青さおなもみや櫓ならの枝えだで包つつまれ、
電でん気き会がい社しゃの前まえの六ろっ本ぽんのプラタナスの木きなどは、中なかにたくさ
んの豆電燈まめでんとうがついて、ほんとうにそこらは人魚にんぎょの都みやこのよう
に見えるのでした。子こどもらは、みんな新あたらしい折おりのついた

着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、

「ケンタウルス、露をふらせ」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしそうに遊んでいたのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首をたれて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮かんでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門をはいり、牛のおいにするうすくらい台所の前に立って、ジョバンニは帽子をぬいで、

「今晚は」と言いましたら、家の中はしいんとして誰も

いたようではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい」ジヨバンニはまっすぐに立つてまた叫びました。するとしばらくたってから、年とった女の人が、どこかぐあいが悪いようにそろそろと出て来て、何か用かと口の中で言いました。

「あの、今日、牛乳が僕んとこへ来なかつたので、もらいにあがったんです」ジヨバンニが一生けん命勢いよく言いました。

「いま誰もいないでわかりません。あしたにしてください」その人は赤い眼の下のところをこすりながら、ジヨバンニを見おろして言いました。

「おっかさんが病氣なんですから今晚でないと困るんです」

「ではもう少したつてから来てください」その人はもう行ってしまいそうでした。

「そうですね。ではありがとうございます」ジヨバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、向この橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六、七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい烏瓜の燈火を持ってやって来るのを見ました。その笑い声も口笛も、みんな聞きおぼえの

あるものでした。ジヨバンニの同級の子供らだったのです。ジヨバンニは思わずどきっとして戻ろうとしましたが、思い直して、いっそう勢いよくそっちへ歩いて行きました。

「川へ行くの」「ジヨバンニが言おうとして、少しのどがつまったように思ったとき、

「ジヨバンニ、ラッコの上着が来るよ」「さっきのザネリがまた叫びました。

「ジヨバンニ、ラッコの上着が来るよ」「すぐみんなが、続いて叫びました。ジヨバンニはまっ赤になって、もう歩いていくかもわからず、急いで行きすぎようと思いましたら、そのなかにカム。パネルラがいたのです。カム。パネルラはき

のどくそうに、だまって少しわらって、おこらないだろうかというようにジョバンニの方を見ていました。

ジョバンニは、にげるようにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行ってまもなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲がる時、ふりかえって見ましたら、ザネリがやはりふりかえって見っていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向こうにぼんやり見える橋の方へ歩いて行ってしまったのでした。ジョバンニは、なんとも言えずさびしくなっていて、いきなり走りだしました。すると耳に手をあてて、わあわあと言いながら片足でぴよんぴよん跳んでいた小さな子供

らは、ジヨバンニがおもしろくてかけるのだと思^{おも}つて、わ
あいと叫^{さけ}びました。

まもなくジヨバンニは走^{はし}りだして黒^{くろ}い丘^{おか}の方^{ほう}へ急^{いそ}ぎまし
た。

五 天気輪の柱

牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ぼんやりふだんよりも低く、連なつて見えました。

ジヨバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんだんのぼつて行きました。まつくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしたされてあつたのです。草の中には、ひかひか青びかりを出す小さな虫もいて、ある葉

は青くすかし出され、ジヨバンニは、さつきみんなの持つて行った烏瓜のあかりのようだとも思いました。

そのまつ黒な、松や榎の林を越えると、にわかにならんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ互っているのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねそうか野ぎくかの花が、そこらいちめん、夢の中からでもかおりだしたというように咲き、鳥が一足、丘の上を鳴き続けながら通って行きました。

ジヨバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げました。

町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのよう

にともり、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞こえて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしずかにそよぎ、ジヨバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷やされました。

野原から汽車の音が聞こえてきました。その小さな列車の窓は、一列小さく赤く見え、その中にはたくさん旅人が、苹果をむいたり、わらったり、いろいろなふうになっていると考えますと、ジヨバンニは、もうなんとも言えずかなしくなつて、また眼をそらに挙げました。

(この間原稿五枚分なし)

ところがいくくら見ている、そのそらは、ひる先生の

言いったような、がらんとした冷つめたいとこだとは思おもわれませ
んでした。それどころでなく、見みれば見みるほど、そこは小ちい
さな林はやしや牧場ぼくじやうやらある野原のほらのように考かんえられてしかたな
かったのです。そしてジヨバンニは青あおい琴ことの星ほしが、三みつつに
も四よつつにもなって、ちらちらまたたき、脚あしが何なんべんも出で
り引ひっ込こんだりして、とうとう蕈きのこのように長ながく延のびるのを
見みました。またすぐ眼めの下したのまちまでが、やっぱりぼんや
りしたたくさんの星ほしの集あつまりか一ひとつの大おおきなけむりかのよ
うに見みえるように思おもいました。

六 銀河ステーション

そしてジヨバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく蛍のように、ぺかぺか消えたりともったりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い鋼青のそらの野原にたちました。いま新しく灼いたばかりの青い鋼の板のような、そらの野原に、まっすぐにすきつと立ったのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、

銀河ステーションと言う声がしたと思うと、いきなり眼の前が、ぱっと明るくなって、まるで億万の螢烏賊の火を一つに化石させて、そらじゅうに沈めたというぐあい、またダイヤモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざと穫れないふりをして、かくしておいた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかえして、ばらまいたというふうに、眼の前がさあっと明るくなって、ジョバンニは、思わず何べんも眼をこすってしまいました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのでした。ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄

いろいろの電燈でんとうのならんだ車室しゃしつに、窓まどから外そとを見みながらすわっていたのです。車室しゃしつの中なかは、青あおい天鵞絨ビロードを張はった腰掛こしかけが、まるでがらあきで、向むここの鼠ねずみいろのワニスを塗ぬった壁かべには、真鍮しんちゆうの大きおおなぼたんが二つ光ひかっているのです。

すぐ前まえの席せきに、ぬれたようにまっ黒くろな上着うわぎを着きた、せい高い子供たか こどもが、窓まどから頭あたまを出だして外そとを見みているのに氣きがつきました。そしてそのこどもの肩かたのあたりが、どうも見たことのあるような氣きがして、そう思おもうと、もうどうしても誰だれだかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこつちも窓まどから顔かおを出だそうとしたとき、にわかこどもにその子供こどもが頭あたまを引ひっ込こめて、こつちを見みました。

それはカム・パネルラだったのです。ジヨバンニが、

カム・パネルラ、きみは前からここにいたの、と言おうと思っおもったとき、カム・パネルラが、

「みんなはね、ずいぶん走はしったけれども遅おくれてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走はしったけれども追おいつかなかつた」と言いいました。

ジヨバンニは、

（そうだ、ぼくたちはいま、いっしょにさそって出でかけたのだ）とおもいながら、

「どこかで待まちっていていようか」と言いいました。するとカム・パネルラは、

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎いにきたんだ」

カムパネルラは、なぜかそう言いながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいというふうでした。するとジョバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというような、おかしい気持ちが出来てしまっていました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直って、勢いよく言いました。

「ああしまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれどかまわない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。川の遠くを飛んでいったって、ぼくはきつと見える」

そして、カムパネルラは、まるい板いたのようになった地図ちずを、しきりにぐるぐるまわして見てみいました。まったく、その中なかに、白しろくあらわされた天あまの川がわの左ひだりの岸きしに沿そって一條じょうの鉄道線路てつどうせんろが、南みなみへ南みなみへとたどって行くいのでした。そしてその地図ちずの立派りっぱなことは、夜よるのようにまっ黒くろな盤ばんの上うえに、一々いちいちの停車場ていしやばや三角標さんかくひょう、泉水せんすいや森もりが、青あおや橙だいだいや緑みどりや、うつくしい光ひかりでちりばめられてありました。

ジヨバンニはなんだかその地図ちずをどこかで見みたようにおもいました。

「この地図ちずはどこで買かったの。黒曜石こくようせきでできてるねえ」
ジヨバンニが言いいました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかったの」

「ああ、ぼく銀河ステーションを通ったろうか。いまぼくたちのいるところ、ここだろう」

「ジオバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。」

「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか」そっちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ」ジオバンニは

言いながら、まるでね上がりたいくらい愉快になって、
足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐ
りの口笛を吹きながら一生けん命延びあがって、その天の
川の水を、見きわめようとしたが、はじめはどうして
もそれが、はっきりしませんでした。けれどもだんだん気
をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よ
りもすきとおって、ときどき眼のかげんか、ちらちら紫い
ろのこまかな波をたてたり、虹のようにぎらっと光ったり
しながら、声もなくどんどん流れて行き、野原にはあっち
にもこっちにも、燐光の三角標が、うつくしく立っていた
のです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いもの

は橙だいだいや黄きいろではつきりし、近いものは青白あおしろく少すこしかすんで、あるいは三角さんかくけい形、あるいは四边しへんけい形、あるいは電いなすまや鎖くさりの形かたち、さまざまにならんで、野原のほらいっぱいひかに光ひかっているのです。ジヨバンニは、まるでどきどきして、頭あたまをやけに振ふりました。するとほんとうに、そのきれいな野原のほらじゅうの青あおや橙だいだいや、いろいろかがやく三角さんかくひょう標めいも、てんでに息いきをつくように、ちらちらゆれたり顫ふるえたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天てんの野原のほらに来きた」ジヨバンニは言いいました。

「それに、この汽車きしや石炭せきたんをたいいていないねえ」ジヨバンニが左手ひだりてをつき出だして窓まどから前まえの方ほうを見みながら言いいまし

た。

「アルコールか電気だろう」カムパネルラが言いました。するとちようど、それに返事するように、どこか遠くのもやのなかから、セロのようなごうごうした声がきこえて来ました。

「この汽車は、ステイムや電気でうごいていない。ただうごくようにきまっているからうごいているのだ。ごとごと音をたてていると、そうおまえたちは思っているけれども、それはいままで音をたてる汽車にばかりなれているためののだ」

「あの声、ぼくなんべんもどろろかできた」

「ぼくだって、林の中や川で、何べんも聞いた」

「ごごとごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そらの
すすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青
じろい微光の中を、どこまでもどこまでもと、走って行く
のでした。」

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だ
ねえ」カムパネルラが、窓の外を指さして言いました。

線路のへりになったみじかい芝草の中に、月長石でも
刻まれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いてい
ました。

「ぼく飛びおりに、あいつをとって、また飛び乗ってみ

せようか」ジヨバンニは胸をおどらせて言いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまったから」

カムパネルラが、そう言ってしまうかしまわないうち、次のりんどうの花が、いっぱいに光って過ぎて行きました。と思つたら、もう次から次から、たくさんいきいるな底をもつたりりんどうの花のコップが、湧くように、雨のように、眼の前を通り、三角標の列は、けむるように燃えるように、いよいよ光って立ったのです。

七 北十字とプリオシン海岸

「おつかさんは、ぼくをゆるしてくださいさるだろうか」

いきなり、カムパネルラが、思い切ったというように、
少しどもりながら、せきこんで言いました。

ジョバンニは、

（ああ、そうだ、ぼくのおつかさんは、あの遠い一つのち
りのように見える橙いろの三角標のあたりにいらっしやっ
て、いまぼくのことを考えているんだった）
と思いながら、
ぼんやりしてだまっていました。

「ぼくはおっかさんが、ほんとうに幸さいわいになるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸さいわいなんだろう」カムパネルラは、なんだか、泣なきだしたいのを、一生しゅじゆうけん命めいこらえているようでした。

「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないじゃないの」「ジョバンニはびっくりして叫さけびました。

「ぼくわからない。けれども、誰だれだって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸さいわいなんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるしてくださいださると思おもう」「カムパネルラは、なにかほんとうに決けつ心しんしているように見みえました。

にわかに、車のなかくるまなかが、ぱっと白くしろ明るくあかなりましました。
見ると、もうじつに、金剛石こんごうせきや草くさの露つゆやあらゆる立派りっぱさを
あつめたような、きらびやかな銀河ぎんがの河床かわどこの上うえを、水みずは声こえ
もなくかたちもなく流ながれ、その流ながれのまん中なかに、ぼうつと
青白あおしろく後光ごこうの射さした一ひとつの島しまが見みえるのでした。その島しまの
平たいらないただきに、立派りっぱな眼めもさめるような、白しろい十字架じゅうじか
がたつて、それはもう、凍こおった北極ほつきょくの雲くもで鑄いたといったら
いいか、すきつとした金きんいろの円光えんこうをいただいて、しずか
に永久えいきゆうに立たっているのですた。

「ハレルヤ、ハレルヤ」前まえからもうしろからも声こえが起おこ
りました。ふりかえって見ると、車室しゃしつの中なかの旅人たびびとたちは、

みなまっすぐにきものひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の数珠をかけたたり、どの人もつつましく指を組み合わせて、そっちに祈っているのです。思わず二人ともまっすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果のあかしのようにつつくしくかがやいて見えました。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

向こう岸も、青じろくぼうつと光ってけむり、時々、やっぱりすすきが風にひるがえるらしく、さっとその銀いろがけむって、息でもかけたように見え、また、たくさんのり

らんだうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい
狐火のように思われました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすき
の列でさえぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方
に見えましたが、じきもうずうつと遠く小さく、絵のよう
になつてしまひ、またすすきがざわざわ鳴つて、とうとう
すっかり見えなくなつてしまひました。ジョバンニのうし
ろには、いつから乗つていたのか、せいの高い、黒いかつ
ぎをしたカトリックふうの尼さんが、まんまるな緑の瞳を、
じつとまっすぐに落として、まだ何かことばか声かが、そつ
ちから伝わつて来るのを、度んで聞いているというように

見みえました。旅人たびびとたちはしずかに席せきに戻もどり、二人ふたりも胸むねいっぱいのかなしみに似にた新あたしい気持きもちを、何気なにげなくちがった語ことばで、そつと談はなし合あったのです。

「もうじき白鳥はくちやうの停車場ていしやばだねえ」

「ああ、十一時じゆついちじかつきりには着つくんだよ」

早くはやも、シグナルの緑みどりの燈あかりと、ぼんやり白しろい柱はしらとが、ち

らつと窓まどのそとを過すぎ、それから硫黄いおうのほのおのようなく

らいぼんやりした転てんてつ機きの前まえのあかりが窓まどの下したを通とおり、

汽車きしやはだんだんゆるやかになつて、まもなくプラットホー

ムの一列いちれつの電燈でんとうが、うつくしく規則きそく正ただしくあらわれ、それ

がだんだん大おおきくなつてひろがつて、二人ふたりはちようど白鳥はくちやう

停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤面には、青く灼かれたはがねの二本の針が、くつきり十一時を指しました。みんなは、一

ぺんにおりて、車室の中はがらんとなってしまいました。

「二十分停車」と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか」ジヨバンニが言いました。

「降りよう」二人は一度にはねあがってドアを飛び出し

て改札口へかけて行きました。ところが改札口には、明る

い紫がかった電燈が、一つ点いているばかり、誰もいませ

んでした。そこらじゅうを見ても、駅長や赤帽らしい人の、

影もなかったのです。

二人は、停車場の前の、水晶細工のように見える銀杏の木に囲まれた、小さな広場に出ました。

そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通っていました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行ったか一人も見えませんでした。二人がその白い道を、肩をならべて行きますと、二人の影は、ちょうど四方に窓のある室の中の、二本の柱の影のように、また二つの車輪の輻のように幾本も幾本も四方へ出るのです。そしてまもなく、あの汽車から見えきれいな河原にきました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ、掌にひろ

げ、指できしきしさせながら、夢のように言っているの
した。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている」

「そうだ」どこでぼくは、そんなことを習ったろうと思
いながら、ジヨバンニもぼんやり答えています。

河原の礫は、みんなすきとおって、たしかに水晶や黄玉
や、またくしゃくしゃの皺曲をあらわしたのや、また稜か
ら霧のような青白い光を出す鋼玉やらでした。ジヨバンニ
は、走ってその渚に行つて、水に手をひたしました。けれ
どもあやしいその銀河の水は、水素よりもっとすきと
おっていたのです。それでもたしかに流れていたことは、

ふたり 二人の手首の、水にひたつたところが、少し水銀いろに浮いたように見え、その手首にぶつつかっただけでできた波は、うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃えるように見えたので、もわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいっばいにはえている崖の下に、白い岩が、まるで運動場のように平らに川に沿って出ているのでした。そこに小さな五、六人の人が、何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立ったりかがんだり、時々なにかの道具が、ピカッと光ったりしました。

「行ってみよう」二人は、まるで一度に叫んで、そっちの方へ走りまわりました。その白い岩になったところの入口に、

「プリオシン海岸」という、瀬戸物のつるつるした標札が立って、向こうの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきのがったくろみの実のようなものをひろいました。

「くるみの実だよ。そら、たくさんある。流れて来たんじゃない。岩の中にはいつてるんだ」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない」

「早くあそこへ行ってみよう。きっと何か掘ってるから」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさっきの方へ近づいて行きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻でこさえたようなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近づいて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそくに書きつけながら、つるはしをふりあげたり、スコップをつかったりしている、三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしていました。

「そこその突起をこわさないように、スコップを使いたまえ、スコップを。おっと、もう少し遠くから掘って。い

けない、いけない、なぜそんな乱暴らんぼうをするんだ」

見ると、その白い柔らかな岩いわの中から、大きな大きな青じろい獣けものの骨ほねが、横よこに倒たおれてつぶれたというふうになって、半分以上掘り出だされていました。そして気きをつけて見ると、そこらには、蹄ひづめの二つある足跡あしあとのついた岩いわが、四角しかくに十ばかり、きれいに切り取きられて番号ばんごうがつけられてありました。「君きみたちは参観さんかんかね」その大学士だいがくしらしい人ひとが、眼鏡めがねをきらつとさせて、こつちを見て話はなしかけました。

「くるみがたくさんあったろう。それはまあ、ざっと百二十万年ひやくにじゅうまんねんぐらい前まえのくるみだよ。ごく新しい方あたひさ。ここは百二十万年前ひやくにじゅうまんねんまえ、第三紀だいさんきのあところは海岸かいがんでね、この

下からは貝がらも出る。いま川の流れているところに、そつくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといってね、おいおい、そこ、つるはしはよしたまえ。ていねいに鑿でやってくれたまえ。ボスといつてね、いまの牛の先祖で、昔はたくさんいたのさ」

「標本にするんですか」

「いや、証明するに要るんだ。ぼくからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらい前にできたという証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水や、がらんとした空か見えやしないかということ

なのだ。わかったかい。けれども、おいおい、そこもスコツプではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてるはずじゃないか」

「だいがくし 大学士はあわてて走って行きました。

「もう時間だよ。行こう」カム。パネルラが地図と腕時計とをくらべながら言いました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします」ジヨバン
二は、ていねいに大学士におじぎしました。

「そうですね。いや、さよなら」大学士は、また忙しそうに、
あちこち歩きまわって監督をはじめました。

二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれな

いように走りはしました。そしてほんとうに、風かぜのように走はしれたのです。息いきも切れず膝ひざもあつくありませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界せかいじゅうだってかけれると、ジヨバンニは思おもいました。

そして二人ふたりは、前まえのあの河原かわらを通とおり、改札口かいさつぐちの電燈でんとうがだんだん大きおおくなって、まもなく二人ふたりは、もとの車室しゃしつの席せきにすわっていま行いって来きた方ほうを、窓まどから見みていました。

八 鳥を捕る人

「いっへかけてもようございますか」

がさがさした、けれども親切^{しんせつ}そうな、大人^{おとな}の声^{こえ}が、二人^{ふたり}のうしろで聞こえました。

それは、茶^{ちや}いろの少^{すこ}しばるぼろの外^{がい}套^{とう}を着^きて、白^{しろ}い巾^{きん}でつつんだ荷^{にもつ}物を、二^{ふた}つに分^わけて肩^{かた}に掛^かけた、赤^{あか}髯^{かひげ}のせなかのかがんだ人^{ひと}でした。

「ええ、いいんです」ジヨバンニは、少^{すこ}し肩^{かた}をすぼめてあいさつしました。その人^{ひと}は、ひげの中^{なか}でかすかに微^わ笑^らい

ながら荷物にもつをゆっくり網棚あみだなにのせました。ジヨバンニは、
なにかたいへんさびしいようなかなしいような気がして、
だまって正面しょうめんの時計とけいを見ていましたら、ずうっと前まえの方ほうで、
硝子ガラスの笛ふえのようなものが鳴なりました。汽車きしゃはもう、しずか
にうごいていたのです。カムパネルラは、車室しやしつの天井てんじやうを、
あちこち見みていました。その一つひとのあかりに黒くろい甲虫かぶとむしがと
まって、その影かげが大きい天井てんじやうにうつっていたのです。赤あかひ
げの人は、なにかなつかしそうにわらいながら、ジヨバン
ニやカムパネルラのようにすを見ていました。汽車きしゃはもうだ
んだん早はやくなって、すすきと川かわと、かわるがわる窓まどの外そとか
ら光ひかりました。

赤あかひげのひと人が、少すこしおおずおずしながら、二ふたり人にき訊ききました。
た。

「あなた方がたは、どちらへいらっしやるんですか」

「どこまでも行くいんです」ジヨバンニは、少すこしきまり悪わるそうに答こたえました。

「それはいいね。この汽き車しゃは、じっさい、どこまででも
行いきますぜ」

「あなたはどこへ行くいんです」カムパネルラが、いきなり、
喧けん嘩かのようにたずねましたので、ジヨバンニは思おもわずわら
いました。すると、向むこうの席せきにいた、とがった帽ぼう子しをか
ぶり、大おおきな鍵かぎを腰こしに下さげた人ひとも、ちらつとここつちを見みて

わらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑
いだしてしまいました。ところがその人は別に起こったで
もなく、頬をびくびくしながら返事をしました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかま
える商売でね」

「何鳥ですか」

「鶴や雁です。さぎも白鳥もです」

「鶴はたくさんいますか」

「いますとも、さっきから鳴いてまさあ。聞かなかつた
のですか」

「いいえ」

「いまでも聞こえるじゃありませんか。そら、耳をすまして聴いてごらんなさい」

二人は眼を挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞こえて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか」

「鶴ですか、それとも鷺ですか」

「鷺です」ジヨバンニは、どっちでもいいと思ひながら答えました。

「そいつはな、雑作ない。さぎというものは、みんな天の川の砂が凝って、ぼおっとできるもんですからね、そし

て始終川へ帰りますからね、川原で待っていて、鷺がみんな、脚をこういうふうにしておりてくるところを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたっと押えちまうんです。するともう鷺は、かたまつて安心して死んじまいます。あとともう、わかり切つてまさあ。押し葉にするだけです」「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか」「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか」「おかしいねえ」カムパネルラが首をかしげました。「おかしいも不審ありませんや。そらその男は立って、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくと解きました。「さあ、ごらんなさい。いまとつて来たばかりです」

「ほんとうに鷺だねえ」二人は思わず叫びました。まっ白な、あのさっきの北の十字架のように光る鷺のからだだが、十ばかり、少しひらべったくなくなって、黒い脚をちぢめて、浮彫りのようにならないでいたのです。

「眼をつぶってるね」カムパネルラは、指でそつと、鷺の三日月がたの白いつぶった眼にさわりました。頭の上の槍のような白い毛もちゃんとしていました。

「ね、そうでしょう」鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくと包んで紐でくくりました。誰がいったいここらで鷺なんぞたべるだろうとジョバンニは思いながら訊きました。

「鷺たぎはおいしいんですか」

「ええ、毎日注文まいにちちゅうもんがあります。しかし雁がんの方が、もっと売うれます。雁がんの方がずっと柄がらがいいし、第一手数だいいちてすうがありますせんからな。そら」鳥捕りとりとは、また別べつの方ほうの包みつつを解ときました。すると黄きと青あおじろとまだらになって、なにかのあかりのようにひかる雁がんが、ちょうどさっきの鷺たぎのように、くちばしをそろえて、少すこしひらべったくなくなって、ならんできました。

「こっちはすぐたべられます。どうです、少すこしおあがりなさい」鳥捕りとりとは、黄きいろの雁がんの足あしを、軽かるくひっぱりました。するとそれは、チョコレートでもできているように、

すつときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい」鳥捕りは、それを二つにちぎってわたしました。ジヨバンニは、ちよつとたべてみて、

（なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。チヨコレートよりも、もっとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかそこの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、たいへんきのどくだ）とおもいながら、やっぱりぼくぼくそれをたべていました。

「も少しおあがりなさい」鳥捕りがまた包みを出しまし

た。ジヨバンニは、もっとたべたかったのですけれども、
「ええ、ありがとう」といって遠慮えんりよしましたら、鳥捕りとりとは、
こんどは向こうむの席せきの、鍵かぎをもった人ひとに出だしました。

「いや、商売しょうばいものをもらっちゃすみませんな」その人ひとは、
帽子ぼうしをとりました。

「いいえ、どういたしまして。どうです、今年ことしの渡り鳥わたどり
の景気けいきは」

「いや、すてきなもんですよ。」昨日おとといの第二限だいにげんころなんか、
なぜ燈台とうだいの灯ひを、規則きそく以外いがいに暗くらくさせるかって、あっちか
らもこっちからも、電話でんわで故障こしょうが来きましたが、なあに、こっ
ちがやるんじゃないなくて、渡り鳥わたどりどもが、まっ黒くろにかたまっ

て、あかしの前まえを通とおるのですからしかたありませんや、わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情くじやうは、おれのとこへ持もって来きたってしかたがねえや、ばさばさのマントを着きて脚あしと口くちとの途方とほうもなく細ほそい大将たいしやうへやれって、こー言いってやりましたかね、はっは」

すすきがなくなつたために、向むここの野原のほらから、ぱつとあかりが射さして来きました。

「鷺さぎの方はなぜ手数てすうなんですか」カムパネルラは、さつきから、訊きこつと思おもっていたのです。

「それはね、鷺さぎをたべるには」鳥捕とりとりは、こっちに向むき直なおりました。「天あまの川がわの水みずあかりに、十とおか日もつるしておく

かね、そうでなけあ、砂すなに三さん、四日よっかうずめなけあいけないんだ。そうすると、水銀すいぎんがみんな蒸発じょうはつして、たべられるよになるよ」

「ごいつは鳥とりじゃない。ただのお菓子かしでしょう」やっばりおなじことを考かんがえていたとみえて、カムパネルラが、思おもい切きったというように、尋たずねました。鳥捕とりとりは、何なにかたいへんあわてたふうで、

「そうそう、ここで降おりなけあ」と言いいながら、立たって荷物にもつをとったと思おもうと、もう見みえなくなっていました。

「どこへ行いったんだろう」二人ふたりは顔かおを見合みあわせましたら、燈台守とうだいもりは、にやにや笑わらって、少すこし伸のびあがるようにしながら

ら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もそっちを見
ましたら、たったいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、う
つくしい燐光を出す、いちめんのかわらははこぐさの上に
立って、まじめな顔をして両手をひろげて、じっとそらを
見ていたのです。

「あすこへ行ってる。ずいぶん奇体だねえ。きつとまた
鳥をつかまえるとこだねえ。汽車が走って行かないうちに、
早く鳥がおりるといいな」と言ったとたん、がらんとした
桔梗いろの空から、さつき見たような鷺が、まるで雪の降
るように、ぎゃあぎゃあ叫びながら、いっぱい舞いおり
て来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだと

いうようにほくほくして、両足りょうあしをかつきり六十度ろくじゅうどに開ひいて立たって、鷺さぎのちぢめて降おりて来くる黒くろい脚あしを両手りょうてで片かたっぱしから押おえて、布ぬのの袋ふくろの中なかに入いれるのでした。すると鷺さぎは、蛩ほたるのように、袋ふくろの中なかでしばらく、青あおくへかへか光ひかったり消きえたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやりしろ白しろくなって、眼めをつぶるのです。ところが、つかまえられる鳥とりよりは、つかまえられないで無ぶ事に天あまの川がわの砂すなの上うえに降おりるものの方ほうが多おほかったです。それは見みていると、足あしが砂すなへつくや否いなや、まるで雪ゆきの解とけるように、縮ちぢまってひらべったくなくなって、まもなく溶と鉱こう炉ろから出でた銅どうの汁じるのように、砂すなや砂利じやりの上うえにひろがり、しばらくは鳥とりの形かたちが、砂すな

についているのですが、それも二、三度明るくなったり暗くなったりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになってしまふのでした。

鳥捕りは、二十疋ばかり、袋に入れてしまふと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたって、死ぬときのような形をしました。と思つたら、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、かえつて、

「ああせいせいした。どうもからだにちようど合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな」というききおぼえのある声が、ジヨバンニの隣りにしました。見ると鳥捕りは、もうそこでとつて来た鷺を、きちんとそろえて、

「一つずつ重ね直なおしているのですか。」

「どうして、あすこから、いっぺんにここへ来きたんですか」
ジヨバンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないような、おかしな気きがして問といました。

「どうしてって、来こようとしたから来きたんです。ぜんたいあなた方がたは、どちらからおいでですか」

ジヨバンニは、すぐ返事へんじをしようと思おもいましたけれども、さあ、ぜんたいどこから来きたのか、もうどうしても考かんえつきませんでした。カムパネルラも、顔かおをまっ赤かにして何なにか思おもい出だそうとしているのです。

「ああ、遠とおくからですね」鳥捕とりとりは、わかったというよ

うに雑^{ぞう}作^{さく}なくうな^なず^ずき^きま^まし^した^た。

九 ジョバンニの切符きつぷ

「もうここからは白鳥区のおしまいです。ごらん下さい。
あれが名高いアルビレオの観測所です」

窓の外の、まるで花火でいっばいのような、あまの川の
まん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立って、その一つ
の平屋根の上に、眼もさめるような、青宝石と黄玉の大き
な二つのすきとおった球が、輪になってしずかにくるくる
とまわっていました。黄いろのがだんだん向こうへまわっ
て行って、青い小さいのがこっちへ進んで来、まもなく二

つのはじは、重なり合って、きれいな緑いろの両面凸レンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみだして、とうとう青いのは、すっかりトパーズの正面にきましたので、緑の中心と黄いろな明るい環とができました。それがまただんだん横へ外れて、前のレンズの形を逆にくり返し、とうとうすつとはなれて、サファイアは向こうへめぐり、黄いろのはこっちへ進み、またちようどさっきのようなふうになりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、睡っているように、しずかによこたわったのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……」鳥捕

りが言いかけたとき、

「切符を拝見いたします」三人の席の横に、赤い帽子をかぶったせいの高い車掌が、いつかまっすぐに立っ
ていて言いました。鳥捕りは、だまってかくしから、小さな紙
きれを出しました。車掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして
（あなた方のは？）というように、指をうごかしながら、
手をジョバンニたちの方へ出しました。

「さあ」ジョバンニは困って、もじもじしていましたら、
カムパネルラはわけもないというふうで、小さな鼠いろの
切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあわててし
まって、もしか上着のポケットにでも、はいつていたかと

おもいながら、手てを入れてみましたら、何かなに大きなたたんだ紙かみきれにあたりました。こんなものはいつていたろうかと思おもって、急いそいで出だしてみましたら、それは四よつつに折おったはがきぐらいの大きおおさの緑みどりいろの紙かみでした。車しゃ掌しょうが手てを出だしているもんですからなんでもかまわない、やっちなまえと思おもって渡わたしましたら、車しゃ掌しょうはまっすぐに立たち直なおってていねいにそれを開ひらいて見みていました。そして読よみながら上うわ着ぎのぼたんやなんかしきりに直なおしたりしていましたし燈とう台だい看かん守しゅも下したからそれを熱ねっ心しんにのぞいていましたから、ジヨバンニはたしかにあれは証しやう明めい書しよか何なにかだつたと思かんが考かえて少すこし胸むねが熱あつくなるような気きがしました。

「これは三次空間の方からお持ちになったのですか」
車掌がたずねました。

「なんだかわかりません」もう大丈夫だと安心しながら
ジヨバンニはそっちを見あげてくつくつ笑いました。

「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは、次の
第三時ころになります」車掌は紙をジヨバンニに渡して向
こうへ行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何だったか待ちかねたと
いうように急いでのできこみました。ジヨバンニも全く早
く見たかったです。ところがそれはいちめん黒い唐草の
ような模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したもの

で、だまって見ているとなんだかその中へ吸い込まれてしまふような気がするのでした。すると鳥捕りが横からちらつとそれを見てあわてたように言いました。

「おや、こいつはたいしたもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじやない、どこでもかってにあるける通行券です。こいつをお持ちになれあ、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行けるはずでさあ、あなた方たいしたもんですね」

「なんだかわかりません」ジヨバンニが赤くなって答えながら、それをまたたたんでかくしに入れました。そして

きまりが悪いのでカム。パネルラと二人、また窓の外をながめていましたが、その鳥捕りの時々たいしたもんだというように、ちらちらこっちを見ているのがぼんやりわかりました。

「もっじき鷺の停車場だよ」カム。パネルラが向こう岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と、地図とを見くらべて言いました。

ジョバンニはなんだかわけもわからずに、にわかにとなりの鳥捕りがきのどくでたまらなくなりました。鷺をつかまえてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびっくりしたように横目で

見てあわててほめだしたり、そんなことを一々いちいち考えていると、もうその見みず知らしらずの鳥捕とりりのために、ジヨバンニの持もっているものでも食たべるものでもなんでもやってしまいたい、もうこの人ひとのほんとうの幸さいわいになるなら、自分じぶんがあの光ひかる天あまの川がわの河原かわらに立たって百年ひゃくねんつづけて立たって鳥とりをとってやってもいいというような気きがして、どうしてももう黙だまっていられなくなりまして。ほんとうにあなたのはしいものはいったい何なんですかと訊きこうとして、それではあんまり出だし抜ぬけだから、どうしようかと考かんえてふり返かえって見みましたら、そこにはもうあの鳥捕とりりがいませんでした。網棚あみだなの上うえには白しろい荷物にもつも見みえなかつたのです。また窓まどの外そとで足あしをふ

んばってそらを見上げて鷺を捕るしたくをしているのかと
思って、急いでそっちを見ましたが、外はいちめんのうつ
くしい砂子と白いすすきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせ
なかもとがった帽子も見えませんでした。

「あの人がどこへ行ったろう」カムパネルラもぼんやりそ
う言っていました。

「どこへ行ったろう。いったいどこでまたあうのだろう。
僕はどうしても少しあの人に物を言わなかったろう」

「ああ、僕もそう思っているよ」

「僕はその人が邪魔なような気がしたんだ。だから僕は
たいへんつらい」ジヨバンニはこんなへんてこな気もちは、

ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで言ったこともないと思（おも）いました。

「なんだか苹果（りんご）のにおいがする。僕（ぼく）いま苹果（りんご）のことを考（かんが）えたためだろうか」カムパネルラが不思議（ふしぎ）そうにあたりを見（み）まわしました。

「ほんとうに苹果（りんご）のにおいだよ。それから野茨（のいばら）のにおいもする」

ジヨバンニもそこらを見（み）ましたがやつぱりそれは窓（まど）からでもはいつて来（く）るらしいのでした。いま秋（あき）だから野茨（のいばら）の花（はな）のにおいのするはずはないとジヨバンニは思（おも）いました。

そしたらにわかになそこに、つやつやした黒（くろ）い髪（かみ）の六（むっ）つば

かりの男の子が赤いジャケットのぼたんもかけず、ひどく
びっくりしたような顔をして、がたがたふるえてはだしで
立っていました。隣りには黒い洋服をきちんと着たせいの
高い青年がっぱいに風に吹かれています。けやきの木のよう
な姿勢で、男の子の手をしっかりとひいて立っていました。

「あら、ごごごごでしよう。まあ、きれいだわ」青年の
うしろに、もひとり、十二ばかりの眼の茶いろな可愛らし
い女の子が、黒い外套を着て青年の腕にすがって不思議そ
うに窓の外を見ているのでした。

「ああ、ここはランカシャヤだ。いや、コンネクテカツ
ト州だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたし

たちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召されているのです」黒服の青年はよろこびにかがやいてその女の子に言いました。けれどもなぜかまた額に深く皺を刻んで、それにたいへんつかれてい
るらしく、無理に笑いながら男の子をジヨバン二のとなりにすわらせました。それから女の子にやさしくカムパネルラのとなりの席を指さしました。女の子はすなおにそこへすわって、きちんと両手を組み合わせました。

「ぼく、おおねえさんのところへ行くんだよう」腰掛けたばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向こうの席にす

わったばかりの青年に言いました。青年はなんとも言えず悲しそうな顔をして、じっとその子の、ちぢれたぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあててしくしく泣いてしまいました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらっしやいます。それよりも、おつかさんはどんなに永く待っていていらっしやったでしょう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたっているだろう、雪の降る朝にみんなと手をつないで、ぐるぐるにわたこのやぶをまわってあそんでいるだろうかと考えたり、ほんとうに待って心配していらっしやる

んですから、早く行^いって、おっかさんにお目^めにかかりましょ
うね」

「うん、だけど僕^{ぼく}、船^{ふね}に乗^のらなけあよかったなあ」

「ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの
立派^{りっぱ}な川^{かわ}、ね、あすこはあの夏^{なつ}じゅう、ツインクル、ツイ
ンクル、リトル、スターをうたってやすむとき、いつも窓^{まど}
からぼんやり白^{しろ}く見^みえていたでしょう。あすこですよ。ね、
きれいでしょう、あんなに光^{ひか}っています」

泣^ないていた姉^{あね}もハンケチで眼^めをふいて外^{そと}を見^みました。
青年^{せいねん}は教^{おし}えるようにそっと姉^{きょうだい}弟^{だい}にまた言^いいました。

「わたしたちはもう、なんにもかなしいことないのです。

わたしたちはこんないいところを旅して、じき神さまのところへ行きます。そこならもう、ほんとうに明るくてにおいがよくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代わりにボートへ乗れた人たちは、きつとみんな助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元氣を出しておもしろくうたって行きましょう」青年は男の子のぬれたような黒い髪をなで、みんなを慰めながら、自分もだんだん顔いろがかがやいてきました。

「あなた方はどちらからいらっしやったのですか。どうなすったのですか」

さっきの燈台看守がやっと少しわかったように青年にたずねました。青年はかすかにわらいました。

「いえ、氷山にぶつつかって船が沈みましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用で二か月前、一足さきに本国へお帰りになったので、あとから発ったのです。私は大学へはいついて、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちょうど十二日目、今日か昨日のあたりです、船が氷山にぶつつかって一へんに傾きもう沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かったのです。ところがボートは左舷の方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないので

す。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となつて、どうか小さな人たちを乗せてくださいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いて、そして子供たちのために祈ってくれました。けれどもそこからボートまでのところには、まだまだ小さな子どもたちや親たちやなんかいて、とても押しのかける勇気がなかったのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思いましたから前にいる子供らを押しのかけようと思いました。けれどもまた、そんなににして助けてあげるよりはそのまま神の御前にみんなで行く方が、ほんとうにこの方たちの幸福だとも思いました。それからまた、その神にそむ

く罪はわたくしひとりですよってぜひとも助けてあげよう
と思いましたが。けれども、どうしても見ているとそれがで
きないのでした。子どもらばかりのボートの中へはなして
やって、お母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがか
なしいのをじっとこらえてまっすぐに立っているなど、と
てももう腸もちぎれるようでした。そのうち船はもうずん
ずん沈みますから、私たちはかたまつて、もうすつかり
覚悟して、この人たち二人を抱いて、浮かべるだけは浮か
ぼうと船の沈むのを待っていました。誰が投げたかライフ
ブイが一つ飛んで来ましたけれどもすべつてずうつと向こ
うへ行ってしまうました。私は一生けん命で甲板の格子に

なつたところをはなして、三人それにしつかりとりつきま
した。どこからともなく三〇六番の声があがりました。たち
まちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいまし
た。そのときにわかには大きな音がして私たちは水に落ち、
もう渦にはいったと思ひながらしつかりこの人たちをだ
て、それからぼうつとしたと思つたらもうここへ来ていた
のです。この方たちのお母さんは一昨年没くなられました。
ええ、ボートはきつと助かつたにちがいありません、なに
せよほど熟練な水夫たちが漕いで、すばやく船からはなれ
ていましたから」

そこらから小さな嘆息やいのりの声が聞こえジョバンニ

もカムパネルラもいままで忘れていたいろいろのことをぼんやり思い出して眼が熱くなりました。

（ああ、その大きな海は。パシフィックというのではなかったろうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、はげしい寒さとたたかって、たれかが一生けんめいはたらいている。ぼくはそのひとにほんとうにきのどくでそしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためになりたいどうしたらいいのだらう）

ジョバンニは首をたれて、すっかりふさがぎ込んでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中のできごとなら、峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから」

燈台守がなぐさめていました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです」

青年が祈るようにそう答えました。

そしてあの姉弟はもうつかれてめいめいぐったり席によりかかって睡っていました。さっきのあのはだしだった足にはいつか白い柔らかな靴をはいていたのです。

ごとごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進
みました。向こうの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈の
ようでした。百も千もの大小さまざまな三角標、その大き
なものの上には赤い点々をうった測量旗も見え、野原のは
てはそれらがいちめん、たくさんたくさん集まってぼおっ
と青白い霧のよう、そこからか、またはもつと向こうから
か、ときどきさまざまの形のぼんやりした狼煙のようなも
のが、かわるがわるきれいな桔梗いろのそらにうちあげら
れるのでした。じつにそのすきとおった奇麗な風は、ばら
のにおいでいっぱいでした。

「いかがですか。こういう苹果はおはじめてでしよう」

向むこうの席せきの燈台看守とうだいかんしゅがいつか黄金きんと紅べにでうつくしくいろどられた大きな苹果りんごを落おとさないように両手りょうてで膝ひざの上うえにかかえていました。

「おや、どっから来たきのですか。立派りっぱですねえ。こちらではこんな苹果りんごができるのですか」青年せいねんはほんとうにびつくりしたらしく、燈台看守とうだいかんしゅの両手りょうてにかかえられた一ひともりの苹果りんごを、眼めを細ほそくしたり首くびをまげたりしながら、われを忘わすれてながめていました。

「いや、まあおとりください。どうか、まあおとりください」

青年せいねんは一ひとつとってジヨバン二ふたたちの方ほうをちよつと見みまし

た。

「さあ、向こうの坊ちゃんがた。いかがですか。おとりく
ださい」

ジョバンニは坊ちゃんといわれたので、すこししゃくに
さわってだまっていました。カムパネルラは、

「ありがとうございます」と言いました。

すると青年は自分でとって一つずつ二人に送ってよこし
ましたので、ジョバンニも立って、ありがとうございますといまし
た。

燈台看守はやっと両腕があいたので、こんどは自分で一
つずつ睡っている姉弟の膝にそっと置きました。

「どいつももありがとう。どこでもできるのですか。こんな立派な苹果は」

青年はつくづく見ながら言いました。

「この辺ではもちろん農業はいたしますすけれどもたいていひとりでもいいものができるとな約束になっております。農業だつてそんなにはねはおれはしません。たいてい自分の望む種子さえ播けばひとりでにどんどんできます。米だつて。パシフィック辺のように殻もないし十倍も大きくてにおいもいいのです。けれどもあなたがたのいらつしゃる方なら農業はもうありません。苹果だつてお菓子だつて、かすが少しもありませんから、みんなそのひとそのひとに

よってちがった、わずかのいいかおりになつて毛あなから
ちらけてしまつのです」

にわかたぐひに男の子がばっちり眼をあいて言いました。

「ああぼくいまお母さんの夢をみていたよ。お母さんが
ね、立派な戸棚や本のあるところにいてね、ぼくの方を見て
手をだしてにこにこにこにこわらつたよ。ぼく、おつかさ
ん。りんごをひろつてきてあげましょうか、と言つたら眼
がさめちやつた。ああここ、さっきの汽車のなかだねえ」
「その苹果がそこにあります。このおじさんにいただき
たのですよ」青年が言いました。

「ありがとうおじさん。おや、かおるねえさんまだねて

るねえ、ぼくおこしてやろう。ねえさん。ごらん、りんごをもらったよ。おきてごらん」

姉あねはわらって眼めをさまし、まぶしそうに両手りょうてを眼めにあてて、それから苹果りんごを見みました。

男おとこの子はまるでパイをたべるように、もうそれをたべていました。またせつかくむいたそのきれいな皮かわも、くるくるコルク抜きぬのような形かたちになって床ゆかへ落おちるまでの間あいだにはすうっと、灰はいいろに光ひかって蒸発じょうはつしてしまうのでした。

二人ふたりはりんごをたいせつにポケットにしまいました。

川下かわしもの向むこう岸ぎしに青あおく茂しげった大きな林はやしが見みえ、その枝えだには熟じゆくしてまっ赤かに光ひかるまるい実みがいっぱい、その林はやしのまん

中に高い高い三角標が立って、森の中からオーケストラ
ベルやジロフォンにまじってなんとも言えずきれいな音
ろが、とけるように浸みるように風につれて流れて来るの
でした。

青年はぞくつとしてからだをふるうようにしました。

だまってその譜を聞いていると、そこらにいちめん黄
ろや、うすい緑の明るい野原か敷物がひろがり、またまっ
白な蟬のような露が太陽の面をかすめて行くように思われ
ました。

「まあ、あの鳥」カムパネルラのとりの、かおると呼
ばれた女の子が叫びました。

「からすでない。みんなかささぎだ」カムパネルラがまた何気なくしかるように叫びましたので、ジョバンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうにしました。まったく河原の青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱい列になってとまってじっと川の微光を受けていたのでした。

「かささぎですなあ、頭のうしろのところに毛がぴんと延びてますから」青年はとりなすように言いました。

向こうの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面にきました。そのとき汽車のずうつとうしろの方から、あの聞きなれた三〇六番の讚美歌のふしが聞こえてきました。よ

ほどの人数で合唱しているらしいのでした。青年はさっと顔いろが青ざめ、たつて一ぺんそっちへ行きそうにしましたがい思いかえしてまたすわりました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。

ジヨバンニまでなんだか鼻が変になりました。けれどもいつともなく誰ともなくその歌は歌い出されだんだんはつきり強くなりました。思わずジヨバンニもカムパネルラもいっしょにうたいたしたのです。

そして青い橄欖の森が、見えない天の川の向こうにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行ってしまう、そこから流れて来るあやしい楽器の音も、もう汽車のひびき

や風の音にすりへらされてずうつとかすかになりました。

「あ、孔雀がいるよ。あ、孔雀がいるよ」

「あの森琴の宿でしょう。あたしきつとあの森の中にもかしの大きなオーケストラの人たちが集まっていらっしゃると思うわ、まわりには青い孔雀やなんかたくさんいると思うわ」

「ええ、たくさんいたわ」女の子がこたえました。

ジヨバンニはその小さく小さくなつていまはもう一つの緑いろの貝ぼたんのように見える森の上にさっさと青じろく時々光つてその孔雀がはねをひろげたりとじたりする光の反射を見ました。

「そうだ、孔雀くじやくの声こえだつてさつき聞きこえた」カム。パネルラおんなが女この子こに言いいました。

「ええ、三十さんじゆつ足つぐらいはたしかにいたわ」女おんなの子こが答こたえ
ました。

ジヨバンニはにわかになんとも言いえずかなしい氣きがして
思おもわず、

「カム。パネルラ、ここからはねおりて遊あそんで行いこうよ」
とこわい顔かおをして言いおうとしたくらいでした。

ところがそのときジヨバンニは川下かわしもの遠とおくの方ほうに不ふ思し議ぎ
なものを見みました。それはたしかになにか黒くろいつるつるし
た細ほそ長ながいもので、あの見みえない天あまの川がわの水みずの上うえに飛とび出だし

てちょっと弓ゆみのようなかたちに進すすんで、また水みずの中なかにかくれたようでした。おかしいと思おもってまたよく気きをつけていましたら、こんどはずっと近ちかくでまたそんなことがあったらしいのでした。そのうちもうあっちでもこっちでも、その黒くろいつるつるした変へんなものが水みずから飛とび出だして、まるく飛とんでまた頭あたまから水みずへくぐるのがたくさん見みえてきました。みんな魚さかなのように川上かわかみへのぼるらしいのでした。

「まあ、なんででしょう。たあちゃん。ごらんなさい。まあたくさんだわね。なんででしょうあれ」

睡ねむそうに眼めをこすっていた男おとこの子こはびっくりしたように立たちあがりました。

「なんだろう」青年も立ちあがりました。

「まあ、おかしい魚だわ、なんででしょうあれ」

「海豚です」カムパネルラがそっちを見ながら答えました。

「海豚だなんてあたしはじめてだわ。けどここ海じゃないんでしょ」

「いるかは海にいますよ。あ、あの不思議な低い声がまたどこからかしました。」

ほんとうにそのいるかのかたちのおかしいことは、二つのひれをちよんどうど両手をさげて不動の姿勢をとったようなふうにして水の中から飛び出して来て、うやうやしく頭を

下にして不動の姿勢のまままた水の中へくぐって行くのでした。見えない天の川の川の水もそのときはゆらゆらと青い焔のように波をあげるのでした。

「いるかお魚でしようか」女の子がカムパネルラにはなしかけました。男の子はぐったりつかれたように席にもたれて睡っていました。

「いるか、魚じゃありません。くじらと同じようなけだものです」カムパネルラが答えました。

「あなたくじら見たことあって」

「僕あります。くじら、頭と黒いしっほだけ見えます。

潮を吹くとちようど本にあるようになります」

「くじらなら大きいわねえ」

「くじら大きいです。子供だっているかぐらいあります」

「そうよ、あたしアラビアンナイトで見たわ」姉は細い
銀いろの指輪をいじりながらおもしろそうにはなしして
いました。

（カムパネルラ、僕もう行っちまうぞ。僕なんか鯨だっ
て見たことないや）

ジヨバンニはまるでたまらないほどいらいらしながら、
それでも堅く、唇を噛んでこらえて窓の外を見ていました。
その窓の外には海豚のかたちももう見えなくなって川は二
つにわかれましました。そのまっくらな島のまん中に高い高い

やぐらが一つ組まれて、その上に一人の寛い服を着て赤い帽子をかぶった男が立っていました。そして両手に赤と青の旗をもつてそらを見上げて信号しているのです。

ジョバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗をふつていましたが、にわかには赤旗をおろしてうしろにかくすようにし、青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のようにはげしく振りました。すると空中にざあつと雨のような音がして、何かまっくらなもの、いくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸のように川の向こうの方へ飛んで行くのでした。ジョバンニは思わず窓からからだを半分出して、そつちを見あげました。美しい美しい桔梗い

ろのがらんとした空の下を、実に何万という小さな鳥どもが、幾組も幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通って行くのでした。

「鳥が飛んで行くな」ジヨバンニが窓の外で言いました。「どら」カム。ハネルラもそらを見ました。

そのときあのやぐらの上のゆるい服の男はにわかには赤い旗をあげて狂気のようにふりうごかしました。するとぴたっと鳥の群れは通らなくなり、それと同時にびしゃあんというつぶれたような音が川下の方で起こって、それからしばらくしいんと思いました。と思ったらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふって叫んでいたのです。

「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥」
その声もはつきり聞こえました。

それといっしょにまた幾万という鳥の群れがそらをまっ
すぐにかけたのです。二人の顔を出しているまん中の窓か
らあの女の子が顔を出して美しい頬をかがやかせながらそ
らを仰ぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそらの
きれいなこと」女の子はジョバンニにはなしかけましたけ
れどもジョバンニは生意気な、いやだと思いつながら、だ
まって口をむすんでそらを見あげていました。女の子は小
さくほっと息をして、だまって席へ戻りました。カムパネ

ルラがきのどくそうに窓から顔を引っ込めて地図を見ていました。

「あの人鳥へ教えてるんでしょうか」女の子がそつとカムパネルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号してるんです。きっとどこからかのろしがあがるためでしょう」

カムパネルラが少しおぼつかないように答えました。そして車の中はしいんとなりました。ジヨバンニはもう頭を引っ込めたかったですけれども明るいとこへ顔を出すのがつらかったので、だまってこらえてそのまま立って口笛を吹いていました。

(どうして僕はこんなになさしいのだろう。僕はもつところもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうっと向こうにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかでつめたい。僕はあれをよく見てここちもちをしずめるんだ)

ジヨバンニは熱くて痛いあたまを両手で押えるようにして、そっちの方を見ました。

(ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。カムパネルラだってあんな女の子とおもしろそうに談しているし僕はほんとうにつらいなあ)

ジヨバンニの眼はまた泪でいっぱいになり、天の川もまるで遠くへ行ったようにぼんやり白く見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖の上を通るよ
うになりました。向こう岸もまた黒いいろの崖が川の岸を
下流に下るにしたがって、だんだん高くなっていくのでし
た。そしてちらっと大きなとうもろこしの木を見ました。
その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大
きな苞が赤い毛を吐いて真珠のような実もちらっと見えた
のでした。それはだんだん数を増してきて、もういまは列
のように崖と線路との間にならび、思わずジヨバンニが窓
から顔を引っ込めて向こう側の窓を見ましたときは、美し

いそらの野原のほらの地平線ちへいせんのはてまで、その大きなとうもろこ
しの木きがほとんどいちめんめんに植うえられて、さやさや風かぜにゆ
らぎ、その立派りっぱなちぢれた葉はのさきからは、まるでひるの
間あいだにいっぱい日光にっこうを吸すった金剛石こんごうせきのように露つゆがいっぱいに
ついて、赤あかや緑みどりやきらきら燃もえて光ひかっているのです。カ
ムパネルラが、

「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに言いいました
けれども、ジョバンニはどうしても気持きもちちがなおりません
でしたから、ただぶつきらぼうに野原のほらを見みたまま、

「そうだろう」と答こたえました。

そのとき汽車きしやはだんだんしずかになって、いくつかのシ

グナルとてんてつ器きの灯あかりを過ぎ、小さな停車場ていしやばにとまりました。

その正面しやうめんの青じろい時計とけいはかつきり第二時だいにじを示しめし、風かぜもなくなり汽車きしやもうごかず、しずかなしずかな野原のほらのなかにその振り子ふりこはカチツカチツと正ただしく時ときを刻きざんでいくのでした。

そしてまったくその振り子ふりこの音おとのたえまを遠とおくの遠とおくの野原のほらのはてから、かすかなかすかな旋律せんりつが糸いとのように流ながれて来るくのでした。

「新世界交響楽しんせかいこうきやうがくだわ」向むこうの席せきの姉あねがひとりごとのようにこっちを見みながらそつと言いいました。

まったくくるまなか
全くもう車の中ではあの黒服の丈高い青年も誰もみんな
やさしい夢を見ていたのでした。

(こんなはずかないいところで僕はどうしてもっと愉快にな
れないだろう。どうしてこんなにひとりさびしいのだろう。
けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といっ
しよに汽車に乗っていたながら、まるであんな女の子とばか
り談しているんだもの。僕はほんとうにつらい)

ジヨバンニはまた手で顔を半分かくすようにして向こう
の窓のそとを見つめていました。

すきとおった硝子のような笛が鳴って汽車はしずかに動
きだし、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛を吹

きました。

「ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから」

うしろの方で誰かとしよらしい人の、いま眼がさめた
というふうではきはき談している声がしました。

「とうもろこしだって棒で二尺も孔をあけておいてそこへ播かないとはえないんです」

「そうですね。川まではよほどありませんようかねえ」

「ええ、ええ、河までは二千尺から六千尺あります。もうまるでひどい峡谷になっているんです」

そうそうここはコロラドの高原じゃなかったらうか、

ジヨバンニは思わずそう思いました。

あの姉は弟を自分の胸によりかからせて睡らせながら黒い瞳をうっとりとして遠くへ投げて何を見てもなしに考え込んでいたのでしたし、カムパネルラはまださびしそうにひとり口笛を吹き、男の子はまるで絹で包んだ苹果のような顔いろをしてジヨバンニの見る方を見ているのでした。突然ともろこしがなくなって巨きな黒い野原がいつぱいにひらけました。

新世界交響楽はいよいよはつきり地平線のはてから湧き、そのまっ黒な野原のなかを一人のインディアンが白い鳥の羽根を頭につけ、たくさん石を腕と胸にかざり、小さな弓に矢をつがえていちもくさんに汽車を追って来るので

した。

「あら、インディアンですよ。インディアンですよ。おねえさまごらんなさい」

黒服くろふくの青年せいねんも眼めをさましました。

ジヨバンニもカムパネルラも立たちあがりました。

「走はしって来くるわ、あら、走はしって来くるわ。追おいかけているんでしょ」

「いいえ、汽車きしゃを追おつてるんじゃないんですよ。獵リョウをするか踊おどるかしてるんですよ」

青年せいねんはいまどこにいるか忘わすれたというふうふうに。ポケットに手てを入れて立たちながら言いいました。

まったくインデアンは半分は踊っているようでした。第一かけるにしても足のふみようがもつと経済もとれ本気にもなれそうでした。にわかにくつきり白いその羽根は前の方へ倒れるようになり、インデアンはびたつと立ちどまって、すばやく弓を空にひきました。そこから一羽の鶴がふらふらと落ちて来て、また走り出したインディアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしそうに立ってわらいました。そしてその鶴をもつてこつちを見ている影も、もうどんどん小さく遠くなり、電しんばしらの碍子がきらつきらつと続いて二つばかり光って、またとうもろこしの林になってしまいました。こつち側の窓

を見ますと汽車はほんとうに高い高い崖の上を走っている、その谷の底には川がやっぱり幅ひろく明るく流れているのです。

「ええ、もうこの辺から下りです。なんせこんどは一へんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃありません。この傾斜があるもんですから汽車は決して向こうからこっちは来ないんです。そら、もうだんだん早くなったでしょう」さっきの老人らしい声が言いました。

どんどんどんどん汽車は降りて行きました。崖のはじめに鉄道がかかるときは川が明るく下へのぞけたのです。ジヨバンニはだんだんこころもちが明るくなってきました。

汽車きしゃが小さな小屋こやの前まえを通とおって、その前まえにしよんぼりひとりの子供こどもが立たってこっちを見みているときなどは思おもわず、ほう、と叫さけびました。

どんどんどんどん汽車きしゃは走はしって行いきました。室中へやじゅうのひとたちは半分はんぶんうしろの方ほうへ倒たおれるようになりながら腰掛こしかけにしっかりとしがみついていた。ジヨバンニは思おもわずカムパネルラとわらいました。もうそして天あまの川がわは汽車きしゃのすぐ横手よこてをいままでよほど激はげしく流ながれて来きたらしく、ときどきちらちら光ひかってながれているのでした。うすあかい河原かわらなでしこの花はながあちこち咲さいていました。汽車きしゃはようやく落おち着ついたようにゆっくり走はしっていました。

向こうとこっちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたっていました。

「あれなんの旗だろうね」ジヨバンニがやっとものを言いました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいてあるねえ」

「ああ」

「橋を架けるとこじゃないんでしょうか」女の子が言いました。

「ああ、あれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ」

その時向こう岸ちかくの少し下流の方で、見えない天の川の水がぎらっと光って、柱のように高くはねあがり、どおとはげしい音がしました。

「発破だよ、発破だよ」カム。パネルラはこおどりしました。その柱のようになった水は見えなくなり、大きな鮭や鱒がきらつきらっと白く腹を光らせて空中にほうり出されてまるい輪を描いてまた水に落ちました。ジョバンニはもうはねあがりたくらい気持ち軽くなって言いました。

「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒なんかがるでこんなになつてはねあげられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことない。いいねえ」

「あの鱒ますなら近くちかで見みたらこれくらいあるねえ、たくさんさかないるんだな、この水みずの中なかに」

「小ちいさなお魚さかなもいるんでしょうか」女おんなの子こが談はなしにつり込こまれて言いいました。

「いるんでしょう。大おおきなのがいるんだから小ちいさいのもいるんでしょう。けれど遠とおくだから、いま小ちいさいの見みえなかつたねえ」ジヨバンニはもうすっかり機きげん嫌なが直なおつておもしろそうにわらつて女おんなの子こに答こたえました。

「あれきつと双ふたご子このお星ほしさまのお宮みやだよ」男おとこの子こがいきなり窓まどの外そとをさして叫さけびました。

右みぎて手の低ひくい丘おかの上うえに小ちいさな水晶すいしやうでもこさえたような二ふた

つのお宮みやがならんで立たっていました。

「双子ふたごのお星ほしさまのお宮みやってなんだい」

「あたし前まえになんべんもお母つかさんから聞きいたわ。ちゃんと小さな水晶すいしゅうのお宮みやで二つならんでいるからきつとそうだわ」

「はなしてごらん。双子ふたごのお星ほしさまが何なにをしたっての」「ぼくも知しってる。双子ふたごのお星ほしさまが野原のほらへ遊あそびにでて、からすと喧嘩けんかしたんだろう」

「そうじゃないわよ。あのね、天あまの川がわの岸きしにね、おっかさんお話はなししなすったわ、……」

「それから彗星ほうきぼしがギーギーフーギーフーって来き

たねえ」

「いやだわ、たあちゃん、そうじゃないわよ。それはべつの方だわ」

「するとあすこにいま笛を吹いているんだらうか」

「いま海へ行ってらあ」

「いけないわよ。もう海からあがっていらっしやったの

よ」

「そうそう。ぼく知ってらあ、ぼくおはなししよう」

川の向こう岸がにわかになりまして。

楊の木や何かもまっ黒にすかし出され、見えない天の川

の波も、ときどきちらちら針のように赤く光りました。まったく向こう岸の野原に大きなまっ赤な火が燃され、その黒いけむりは高く桔梗いろのつめたそうな天をも焦がしそうでした。ルビーよりも赤くすきとおり、リチウムよりもうつくしく酔ったようになって、その火は燃えているのでした。

「あれはなんの火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう」 ジョバンニが言いました。

「蠍の火だな」カムパネルラがまた地図と首っぴきして答えました。

「あら、蠍の火のことならあたし知ってるわ」

「蠍の火つてなんだい」ジヨバンニがききました。

「蠍がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるつて、あたし何べんもお父さんから聞いたわ」

「蠍って、虫だろう」

「ええ、蠍は虫よ。ただどいい虫だわ」

「蠍いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかきがあつてそれで螫されると死ぬって先生が言つてたよ」

「そうよ。ただどいい虫だわ、お父さんこう言つたのよ。むかしのバルドラの野原に一びきの蠍がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですつて。するとある日い

たちに見つかって食べられそうになったんですって。さそりは一生存けん命にげてにげたけど、とうとういたちに押えられそうになったわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまったわ、もうどうしてもあがられないで、さそりはおぼれはじめたのよ。そのときさそりはこう言ってお祈りしたというの。

ああ、わたしはいままで、いくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がかんどのたちにとられようとしたときはあんなに一生存けん命にげた。それでもとうとうこんなになつてしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだを、だまっていたちにく

れてやらなかったろう。そしたらいたちも一日^{いちにち}生きのびたろうに。どうか神^{かみ}さま。私^{わたし}の心^{こころ}をごらんください。こんなにもむなしく命^{いのち}をすてず、どうかこの次^{つぎ}には、まことのみんなの幸^{さいわい}のために私^{わたし}のからだをおつかいください。って言^いったというの。

そしたらいつか蠍^{さそり}はじぶんのからだ^{からだ}が、まっ赤^かなうつくしい火^ひになって燃^もえて、よるのやみを照^てらしているのを見^みたって。いまでも燃^もえてるってお父^{とう}さんおっしゃったわ。ほんとうにあの火^ひ、それだわ」

「そうだ。見^みたまえ。そこらの三角^{さんかく}標^{ひょう}はちようどさそりの形^{かたち}にならんでいるよ」

ジヨバンニはまったくその大きな火の向こうに三つの三角標が、ちようどさそりの腕のように、こっちに五つの三角標がさそりの尾やかぎのようにならないで見ました。そしてほんとうにそのまっ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれて、みんなはなんとも言えずにぎやかな、さまざまの楽の音や草花のにおいのようなもの、口笛や人々のざわざわ言う声やらを聞きました。それはもうじきちかくに町か何かがあつて、そこにお祭りでもあるというような気がするのです。

「ケンタウル露をふらせ」いきなりいままで睡っていた

ジヨバンニのとなりの男の子が向こうの窓を見ながら叫んでいました。

ああそこにはクリスマスストーリーのようにまつ青な唐檜かもみの木がたって、その中にはたくさんのおとぎ話の豆電燈がまるで千の螢でも集まったようについていました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ」カムパネルラがすぐ言いました。

(此の間原稿なし)

「ボール投げなら僕決してはずさない」

男の子が大いばりで言いました。

「もうじきサウザンクロスです。おりるしたくをしてください」青年がみんなに言いました。

「僕も少し汽車に乗ってるんだよ」男の子が言いました。カムパネルラのとりの女の子はそわそわ立ってしたくをはじめましたけれどもやっぱりジヨバンニたちとわかれたくないようなようすでした。

「ここでおりにけあいけないのです」青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら言いました。

「厭だ。僕も少し汽車へ乗ってから行くんだい」ジヨバンニがこらえかねて言いました。

「僕たちといっしょに乗って行こう。僕たちどこまでだつて行ける切符持ってるんだ」

「だけどあたしたち、もうここで降りなけあいけないのよ。ここ天上へ行くところなんだから」

女の子がさびしそうに言いました。

「天上へなんか行かなくていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりももっといいところをこさえなけあいけないって僕の先生が言ったよ」

「だってお母さんも行ってらっしゃるし、それに神さまがおっしゃるんだわ」

「そんな神さまうその神さまだいい」

「あなたの神さまうその神さまよ」

「そうじゃないよ」

「あなたの神さまってどんな神さまですか」 青年は笑いながら言いました。

「ぼくほんとうはよく知りません。けれどもそんなんでなしに、ほんとうのたった一人の神さまです」

「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です」

「ああ、そんなんでなしに、たったひとりのほんとうのほんとうの神さまです」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前に、わたくしたちとお会

いになることを祈ります」青年はつつましく両手を組みました。

女の子もちょうどその通りにしました。みんなほんとうに別れが惜しそうで、その顔いろも少し青ざめて見えませんでした。ジヨバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあもうしたくはいいんですか。じきサウザンクロスですから」

ああそのときでした。見えない天の川のずうつと川下に青や橙や、もうあらゆる光でちりばめられた十字架が、まるで一本の木というふういっぽんに川の中かわから立たってかがやき、そ

の上には青じろい雲がまるい環になって後光のようにか
かっているのです。汽車の中がまるでざわざわしました。
みんなあの北の十字のときのようにまっすぐに立ってお祈
りをはじめました。あっちにもこっちにも子供が瓜に飛び
ついたときのようなよろこびの声や、なんとも言いような
い深いつつましいためいきの音ばかりきこえました。そし
てだんだん十字架は窓の正面になり、あの苹果の肉のよう
な青じろい環の雲も、ゆるやかにゆるやかに繞っているの
が見えました。

「ハレルヤ、ハレルヤ」明るくたのしくみんなの声はひ
びき、みんなはそのそらの遠くから、つめたいそらの遠く

から、すきとおったなんとも言えずさわやかなラッパの声をききました。そしてたくさんのシグナルや電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになり、とうとう十字架のちようどま向かいに行つてすつかりとまりました。

「さあ、おりるんですよ」青年は男の子の手をひき姉は互いにえりや肩をなおしてやってだんだん向こうの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら」女の子がふりかえつて二人に言いました。

「さよなら」ジヨバンニはまるで泣き出したいのをこらえておこつたようにぶっきらぼうに言いました。

女の子はいかにもつらそうに眼を大きくして、も一度こつちをふりかえって、それからあとはもうだまって出て行ってしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまいにわかにならんとして、さびしくなり風がいったいに吹き込みました。

そして見てみるとみんなはつつましく列を組んで、あの十字架の前の天の川のなぎさにひざまずいていました。そしてその見えない天の川の水をわたって、ひとりのこうごうしい白いきもの人が手をのばしてこつちへ来るのをふたりは見ました。けれどもそのときはもう硝子の呼び子は鳴らされ汽車はうごきだし、と思つうちに銀いろの霧が

川下かわしもの方ほうから、すうつと流ながれて来きて、もうそつちは何なにも見みえなくなりました。ただたくさんのくるみの木きが葉はをさんさんと光ひからしてその霧きりの中なかに立たち、黄金きんの円光えんこうをもった電気栗鼠でんきりすが可愛かわいい顔かおをその中なかからちらちらのぞいているだけでした。

そのとき、すうつと霧きりがはれかかりました。どこかへ行いく街道かいどうらしく小ちいさな電燈でんとうの一列いちれつについた通とおりがありました。それはしばらく線路せんろに沿そって進すすんでいました。そして二人ふたりがそのあかしの前まえを通とおって行いくときは、その小ちいさな豆まめいろの火ひはちようどあいさつでもするよつにほかつと消きえ、二人ふたりが過すぎて行いくときまた点つくのでした。

ふりかえって見ると、さっきの十字架はすっかり小さく
なつてしまい、ほんとうにもうそのまま胸にもつるされそ
うになり、さっきの女の子や青年たちがその前の白い渚に
まだひざまずいているのか、それともどこか方角もわから
ないその天上へ行ったのか、ぼんやりして見分けられませ
んでした。

ジョバンニは、ああ、と深く息しました。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、ど
こまでもどこまでもいっしょに行こう。僕はもう、あのさ
そりのように、ほんとうにみんなの幸のためならば僕のか
らだなんか百へん灼いてもかまわない」

「うん。僕だってそうだ」カム。パネルラの眼にはきれいな涙がうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいはいったいなんだろう」

ジヨバンニが言いました。

「僕わからない」カム。パネルラがぼんやり言いました。

「僕たちすっかりやるうねえ」ジヨバンニが胸いっぱい新しい力が湧くように、ふうと息をしながら言いました。

「あ、あそこ石炭袋だよ。そらの孔だよ」カム。パネルラが少しそっちを避けるようにしながら天の川のひととを指さしました。

ジヨバンニはそっちを見て、まるでぎくつとしてしまい

ました。天あまの川がわの一ひととこに大おおきなままつくららな孔あなが、どおんとあいているのです。その底そこがどれほど深ふかいか、その奥おくに何なにがあるか、いくら眼めをこすつてのぞいてもなんにも見みえず、ただ眼めがしんしんと痛いたむのでした。ジヨバンニが言いいました。

「僕ぼくもうあんな大おおきな暗やみの中なかだつてこわくない。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行くい。どこまでもどこまでも僕ぼくたちいっしょに進すすんで行いこう」

「ああきつと行くいよ。ああ、あすこの野原のはらはなんてきれいだろう。みんな集あつまつてるねえ。あすこがほんとうの天上てんじょうなんだ。あつ、あすこにいるのはぼくのお母かあさんだよ」

カムパネルラはにわかまどに窓まどの遠とおくに見みえるきれいな野原のほらを指さして叫さけびました。

ジョバンニもそつちを見みましたけれども、そこはぼんやり白しろくけむっているばかり、どうしてもカムパネルラが言いったように思おもわれませんでした。

なんとも言いえずさびしい気きがして、ぼんやりそつちを見みていましたら、向むこうの河岸かわぎしに二本にほんの電でん信しんばしらが、ちよりうど両方りょうほうから腕うでを組くんだように赤あかい腕木うでぎをつらねて立たっていました。

「カムパネルラ、僕ぼくたちいっしょに行いこうねえ」ジョバンニがこう言いいながらふりかえって見みましたら、そのいま

までカムパネルラのすわっていた席せきに、もうカムパネルラの形かたちは見えず、ただ黒いびろうどばかりひかっています。ジヨバンニはまるで鉄砲丸てっぽうだまのように立ちあがりました。そして誰だれにも聞きこえないように窓まどの外そとへからだを乗のり出して、力ちからいっぱいはげしく胸むねをうって叫さけび、それからもう咽喉のどいっぱい泣なきだしました。

もうそこらが一いっへんにまっくらになったように思おもいました。そのとき、

「おまえはいったい何を泣ないているの。ちょっとこっちをごらん」いままでたびたび聞きこえた、あのやさしいセロのような声こゑが、ジヨバンニのうしろから聞きこえました。

ジヨバンニは、はっと思つて涙をはらつてそつちをふり
向きました、さつきまでカムパネルラのすわっていた席に
黒い大きな帽子をかぶつた青白い顔のやせた大人が、やさ
しくわらつて大きな一冊の本をもっていました。

「おまえのともだちがどこかへ行ったのだから。あのひ
とはね、ほんとうにこんや遠くへ行ったのだ。おまえはも
うカムパネルラをさがしてもむだだ」

「ああ、どうしてなんですか。ぼくはカムパネルラといっ
しよにまつすぐに行こうと言つたんです」

「ああ、そうだ。みんながそう考える。けれどもいっしよ
に行けな。そしてみんながカムパネルラだ。おまえがあ

うどんなひとでも、みんな何^{なん}べんもおまえといっしょに
苹果^{りんご}をたべたり汽車^{きしゃ}に乗^のったりしたのだ。だからやっぱり
おまえはさつき考^{かんが}えたように、あらゆるひとのいちばんの
幸福^{ひょうふ}をさがし、みんなといっしょに早^{はや}くそこに行く^いがいい、
そこではかりおまえはほんとうにカムパネルラといつまで
もいっしょに行^いけるのだ」

「ああぼくはきつとそうします。ぼくはどうしてそれを
もとめたらいいでしょう」

「ああわたくしもそれをもとめている。おまえはおまえ
の切符^{きっぷ}をしっかりとっておいで。そして一^{いち}しんに勉強^{べんきやう}しな
けあいけない。おまえは化学^{かがく}をならったろう、水^{みず}は酸素^{さんそ}と

水素からできているといふことを知っている。いまはだれ
だってそれを疑やしない。実験してみるとほんとうにそう
なんだから。けれども昔はそれを水銀と塩でできていると
言ったり、水銀と硫黄でできていると言ったりいろいろ
議論したのだ。みんながめいめいじぶんの神さまがほん
とうの神さまだというだろう、けれどもお互いほかの神さま
を信ずる人たちのしたことでも涙がこぼれるだろう。それ
からぼくたちの心がいいとかわるいとか議論するだろう。
そして勝負がつかないだろう。けれども、もしおまえがほ
んとうに勉強して実験でちゃんとほんとうの考えと、うそ
の考えとを分けてしまえば、その実験の方法さえきまれば、

もう信仰も化学と同じようになる。けれども、ね、ちよつとこの本をござらん、いいかい、これは地理と歴史の辞典だよ。この本のこの頁はね、紀元前二千二百年の地理と歴史が書いてある。よくござらん、紀元前二千二百年のことでないよ、紀元前二千二百年のところにみんなが考えていた地理と歴史というものが書いてある。

だからこの頁一つが一冊の地歴の本にあたるんだ。いいかい、そしてこの中に書いてあることは紀元前二千二百年ころにはたいてい本当だ。さがすと証拠もぞくぞく出てくる。けれどもそれが少しどうかなくこう考えだしてござらん、そら、それは次の頁だよ。

紀元前^{きげんぜん}一千年^{いつせんねん}。だいぶ、地理^{ちり}も歴史^{れきし}も変わ^かってるだろう。このときにはこうなのだ。変^{へん}な顔^{かお}をしてはいけない。ぼくたちはぼくたちのからだだって考^{かん}えだって、天^{あま}の川^{がわ}だって汽車^{きしゃ}だって歴史^{れきし}だって、ただそう感^{かん}じているのなんだから、そらごらん、ぼくといっしょにすこしこころもちをしずかにしてごらん。いいか」

そのひとは指^{ゆび}を一本^{いっぽん}あげてしずかにそれをおろしました。するといきなりジヨバンニは自分^{じぶん}というものが、じぶんの考^{かん}えというものが、汽車^{きしゃ}やその学^{がく}者^{しや}や天^{あま}の川^{がわ}や、みんないっしょにぼかっと光^{ひか}って、しいんとなくなつて、ぼかつともつてまたなくなつて、そしてその一^{ひと}つがぼかつと

もると、あらゆる広い世界ががらんとひらけ、あらゆる歴史がそなわり、ずっと消えると、もうがらんとした、ただもうそれつきりになってしまっのを見ました。だんだんそれが早くなって、まもなくすっかりもとのとおりにになりました。

「さあいいか。だからおまえの実験は、このきれぎれの考えのはじめから終わりすべてにわたるようになければいけない。それがむずかしいことなのだ。けれども、もちろんそのときだけのでもいいのだ。ああごらん、あすこにプレシオスが見える。おまえはあのプレシオスの鎖を解かなければならない」

そのときまっくらな地平線の向こうから青じろいのろしが、まるでひるまのようにうちあげられ、汽車の中はすっかり明るくなりました。そしてのろしは高くそらにかかって光りつづけました。

「ああマジエランの星雲だ。さあもうきつと僕は僕のために、僕のお母さんのために、カムパネルラのために、みんなのために、ほんとうのほんとうの幸福をさがすぞ」

ジョバンニは唇を噛んで、そのマジエランの星雲をのぞんで立ちました。そのいちばん幸福なそのひとのために！

「さあ、切符をしっかりと持っておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしにほんとうの世界の火やばげしい波の中を

「おおまた
大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。天の川の
なかでたった一つの、ほんとうのその切符を決しておまえ
はなくしてはいけない」

「あのセロのような声でしたと思つたとジヨバンニは、あの
天の川がもうまるで遠く遠くなくなって風が吹き自分はまっす
ぐに草の丘に立っているのを見、また遠くからあのブルカ
二口博士の足おとのしずかに近づいて来るのをききまし
た。」

「ありがとう。私はたいへんいい実験をした。私はこん
なしずかな場所で遠くから私の考えを人に伝える実験をし
たいとさつき考えていた。お前の言った語はみんな私の

きました。林はやしの中でとまってそれをしらべてみましたら、
あの緑みどりいろのさつき夢ゆめの中で見たあやしい天てんの切符きっぷの中なかに
大きな二枚にまいの金貨きんかが包つつんでありました。

「博士はかせありがとう、おつかさん。すぐ乳ちちをもって行きま
すよ」

ジヨバンニは叫さけんでまた走はしりはじめました。何かなにいろい
ろのものが一いっぺんにジヨバンニの胸むねに集あつまってなんとも言い
えずかなしいような新あたらしいような気きがするのです。

琴ことの星ほしがずうっと西にしの方ほうへ移うつってそしてまた夢ゆめのように
足あしをのばしていました。

ジヨバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのでした。胸はなんだかおかしく熱り、頬にはつめたい涙がながれていました。

ジヨバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさっきの通りに下でたくさん灯を綴ってはいました。が、その光はなんだかさっきよりは熱したというふうでした。

そしてたったいま夢であるいた天の川もやっぱりさっきの通りに白くぼんやりかかり、まっ黒な南の地平線の上ではことにけむったようになって、その右には蠍座の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変

わってもないようでした。

ジヨバンニはいっさんに丘を走って下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っているお母さんのことが胸いっばいに思いだされたのです。どんどん黒い松の林の中を通って、それからほの白い牧場の柵をまわって、さっきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。そこには誰かがいま帰ったらしく、さっきなかった一つの車が何かの樽を二つ載つけて置いてありました。

「今晚は」ジヨバンニは叫びました。

「はい」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「なんのご用ですか」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかったのですが」

「あ、済みませんでした」その人はすぐ奥へ行って一本の牛乳瓶をもって来てジヨバン二に渡しながら、また言いました。

「ほんとうに済みませんでした。今日はひるすぎ、うつかりしてこうしの柵をあけておいたもんですから、大將さっそく親牛のところへ行って半分ばかりのんでしまましてね……」その人はわらいました。

「そうですか。ではいただいで行きます」

「ええ、どうも済みませんでした」

「ううえ」

ジヨバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもって牧場の柵を出ました。

そしてしばらく木のある町を通って大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になって、その右手の方、通りのはずれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行った川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

ところがその十字になった町かどや店の前に女たちが七、八人ぐらいつ集まって橋の方を見ながら何かひそひそ談しているのです。それから橋の上にもいろいろなあか

りがいっばいなのでした。

ジヨバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなつたように思
いました。そしていきなり近くの人たちへ、

「何かあつたんですか」と叫ぶようにききました。

「ごどもが水へ落ちたんですよ」一人が言いますと、そ
の人たちは一斉にジヨバンニの方を見ました。ジヨバンニ
はまるで夢中で橋の方へ走りましました。橋の上は人でいっば
いで河が見えませんでした。白い服を着た巡査も出ていま
した。

ジヨバンニは橋の袂から飛ぶように下の広い河原へおり
ました。

その河原の水ぎわに沿ってたくさんあかりがせわしくのぼったり下ったりしてました。向こう岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいてました。そのまん中をもう烏瓜のあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろにしばらくに流れていたのでした。

河原のいちばん下流の方へ洲のようになって出たところに人の集まりがくつきりまっ黒に立ってました。ジョバンニはどんだんそっちへ走りました。するとジョバンニはいきなりさつきカムパネルラといっしょだったマルソに会いました。マルソがジョバンニに走り寄って言いました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ」

「どいつして、いつ」

「ザネリがね、舟ふねの上うへから鳥からすつりのあかりを水みずの流れながる方ほうへ押おしてやろうとしたんだ。そのとき舟ふねがゆれたもんだから水みずへ落おつこつたろう。するとカムパネルラがすぐ飛とびこんだんだ。そしてザネリを舟ふねの方ほうへ押おしてよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見みえないんだ」

「みんなさがしてるんだろう」

「ああ、すぐみんな来た。カムパネルラのお父とうさんも来た。けれども見みつかからないんだ。ザネリはうちへ連つれられてつた」

ジヨバンニはみんなのいるそっちの方へ行きました。そこに学生たちや町の人たちに囲まれて青じろいのがったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまっすぐに立って左手に時計を持ってじっと見つめていたのです。みんなもじっと河を見していました。誰も一言も物を言う人もありませんでした。ジヨバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたぐさんせわしく行ったり来たりして、黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れているのが見えるのでした。

下流の方の川はばいっばい銀河が巨きく写って、まるで水のないそのままのそらのように見えました。

ジヨバンニは、そのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかないというような気がしてしかたなかったのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ」と言いながらカムパネルラが出て来るか、あるいはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかというような気がしてしかたないらしいのでした。けれどもにわかにかムパネルラのお父さんがきつぱり言いました。

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから」

ジョバンニは思わずかけよって博士の前に立って、ぼくはカムパネルラの行った方を知っています、ぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたので、と言おうとしましたが、もうのどがつまってなんとも言えませんでした。すると博士はジョバンニがあいさつに来たとでも思ったものですか、しばらくしげしげジョバンニを見ていましたが、「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晩はありがとうございました」とていねいに言いました。

ジョバンニは何も言えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか」博士は堅く時計を握ったまま、またききました。

「いいえ」ジヨバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ、ぼくには一昨日たいへん元気な便りがあったんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジヨバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね」

そう言いながら博士はまた、川下の銀河のいっばいにうつった方へじつと眼を送りました。

ジヨバンニはもういろいろなことで胸がいつぱいで、なんにも言えずに博士の前をはなれて、早くお母さんに牛乳を持って行って、お父さんの帰ることを知らせようと思うと、もういちもくさんに河原を街の方へ走りまわりました。

ダ
ス
コ
ー
ブ
ド
リ
の
伝でん記き

グスコーブドリは、イーハトーヴの大きな森^{もり}のなかに生まれました。おとうさんは、グスコーナドリという名^な高^{たか}い木^きこりで、どんな大^{おお}きな木^きでも、まるで赤^{あか}ん坊^{ぼう}を寝^ねかすつけるようにわけなく切^きつてしま^ひう人^{ひと}でした。

ブドリにはネリという妹^{いもうと}があつて、二人^{ふたり}は毎^{まい}日^{にち}森^{もり}で遊^{あそ}びました。ごしつごしつとおとうさんの木^きを挽^ひく音^{おと}が、やつと聞^きこえるくらいな遠^とくへも行^いきました。二人^{ふたり}はそこで木^きいちごの実^みをとつてわき水^{みず}につけたり、空^{そら}を向^むいてかわるがわる山^{やま}鳩^{ばと}の鳴^なくまねをしたりしました。するとあちらで

もこちらでも、ぼう、ぼう、と鳥とりが眠ねむそうに鳴なき出すのでした。

おかあさんが、家の前まえの小さな畑はたけに麦むぎを播まいているときは、二人ふたりはみちにむしろをしいてすわって、ブリキかんで蘭らんの花はなを煮にたりしました。するとこんどは、もういろいろの鳥とりが、二人ふたりのばさばさした頭あたまの上うえを、まるで挨拶あいさつするように鳴なきながらざあざあざあ通りすぎるのでした。

ブドリが学校がっこうへ行くようになり、森もりはひるの間あいだたいへんさびしくなりました。そのかわりひるすぎには、ブドリはネリといっしょに、森もりじゅうの木きの幹みきに、赤あかい粘ねんど土どや消けし炭すみで、木きの名なを書かいてあるいたり、高たかく歌うたったりし

ました。

ホップのつるが、両方からのびて、門のようになつてい
る白樺の木には、

「カツコウドリ、トオルベカラズ」と書いたりもしました。
そして、ブドリは十になり、ネリは七つになりました。
ところがどういふわけですか、その年は、お日さまが春か
ら変に白くて、いつもなら雪がとけるとまもなく、まっし
ろな花をつけるこぶしの木もまるで咲かず、五月になつて
もたびたび曇りがぐしゃぐしゃ降り、七月の末になつても
いっこうに暑さが来ないために、去年播いた麦も粒の入ら
ない白い穂しかできず、たいていの果物も、花が咲いただ

けで落ちてしまったのでした。

そしてとうとう秋になりましたが、やっぱり栗の木は青いからのいがばかりでしたし、みんなでふだんたべるいちばんたいせつなオリザという穀物も、一つぶもできませんでした。野原ではもつひどいさわぎになってしまいました。

ブドリのおとうさんもおかあさんも、たびたび薪を野原のほうへ持って行ったり、冬になってからは何べんも大きな木を町へそりで運んだりしたのでした。いつもがっかりしたようにして、わずかの麦の粉などもって帰ってくるのでした。それでもどうにかその冬は過ぎ去り、次の春になり、畑にはたいせつにしまっておいた種も播かれましたが、そ

の年としもまたすっかり前まえの年としのとおりでした。そして秋あきになると、とうとうほんとうの饑饉ききんになってしまいました。もうそのころは学校がっこうへ来ることもまるとありませんでした。ブドリののおとうさんもおかあさんも、すっかり仕事しごとをやめていました。そしてたびたび心配しんぱいそうに相談そうだんしては、かわるがわる町まちへ出て行って、やっとすこしばかりの黍きびの粒つぶなど持もって帰かえることもあれば、なんにも持もたずに顔かおいろを悪わるくして帰かえってくることもありました。そしてみんなは、こならの実みや、葛くずやわらびの根ねや、木きの柔やわらかな皮かわやいろんなものをたべて、その冬ふゆをすごしました。

けれども春はるが来きたころは、おとうさんもおかあさんも、

何かひどい病氣びようきのようでした。

ある日おとうさんは、じつと頭あたまをかかえて、いつまでもいつまでも考えていましたが、にわかわかに起きあがって、「おれは森もりへ行って遊あそんでくるぞ。」と言いいながら、よろよろ家いえを出でて行いきました。まっくらになっても帰かえって来きませんでした。二人ふたりがおかあさんに、おとうさんはどうしたろうときいても、おかあさんはだまって二人ふたりの顔かおを見みているばかりでした。

次つぎの日の晩方ばんがたになって、森もりがもう黒くろく見みえるころ、おかあさんはにわかわかに立たって、炉ろに櫓ほだをたくさんくべて家いえじゅうすつかり明あかるくしました。それから、わたしはおとうさ

んをさがしに行くから、お前たちはうちにいてあの戸棚にある粉を二人ですこしずつたべなさいと言って、やっぱりよろよろ家を出て行きました。二人が泣いてあとから追っ
て行きますと、おかあさんはふり向いて、

「なんたらいうつことをきかないごどもらだ。」としかるように言いました。

そしてまるで足早に、つまずきながら森へは行ってしまいました。二人は何べんも行ったり来たりして、そこらを泣いて回りました。とうとうこらえ切れなくなつて、まっくらな森の中へは行って、いつかのホップの門のあたりや、わき水のあるあたりをあちこちうろうろ歩きながら、おか

あさんを一晩呼びました。森の木の間からは、星がちらちら何か言うようにひかり、鳥はたびたびおどろいたように暗の中を飛びましたけれども、どこからも人の声はしませんでした。とうとう二人はぼんやり家へ帰って中へはいりますと、まるで死んだように眠ってしまいました。

ブドリが目をさましたのは、その日のひるすぎでした。おかあさんの言った粉のことを思い出して戸棚をあけて見ますと、なかには、袋に入れたそば粉やこならの実がまだたくさんはいつていました。ブドリはネリをゆり起こして二人でその粉をなめ、おとうさんたちがいたときのように炉に火をたきました。

それから、二十日ばかりぼんやり過ぎましたら、ある日戸口で、

「今日は、だれかいるかね。」と言うものがありました。おとうさんが帰って来たのかと思つて、ブドリがはね出して見ますと、それは籠をしょつた目の鋭い男でした。その男は籠の中から丸い餅をとり出してほんと投げながら言いました。

「私はこの地方の飢饉を助けに来たものだ。さあなんでも食べなさい。」二人はしばらくあきれていましたら、

「さあ食べるんだ、食べるんだ。」とまた言いました。二人がこわごわたべはじめますと、男はじつと見ていましたが、

「お前^{まえ}たちはいい子供^{こども}だ。けれどもいい子供^{こども}だというだけではなんにもならん。わしといっしょについておいで。もつとも男^{おとこ}の子^こは強いし、わしも一人^{ふたり}はつれて行^いけない。おい女^{おんな}の子^こ、おまえはここにいてももつたべるものがないんだ。おじさんといっしょに町^{まち}へ行^いこう。毎日^{まいにち}パンを食^たべさせてやるよ。」そしてふいっとネリを抱^だきあげて、せなかの籠^{かご}へ入^いれて、そのまま、

「おおほいほい。おおほいほい。」とどなりながら、風^{かぜ}のように家^{いえ}を出^でて行^いきました。ネリはおもてではじめてわっと泣^なき出^だし、ブドリは、

「どろぼう、どろぼう。」と泣^なきながら叫^{さけ}んで追^おいかけまし

だが、男はもう森の横を通ってずうっと向こうの草原を走っていて、そこからネリの泣き声がかすかにふるえて聞こえるだけでした。

ブドリは、泣いてどなって森のはずれまで追いかけて行きました。きましたが、とうとう疲れてばったり倒れてしまいました。

二 てぐす工場てぐすこうじょう

ブドリがふっと目をひらいたとき、いきなり頭あたまの上うえで、
いやに平ひらべったい声こえがしました。

「やっと目めがさめたな。まだお前まえは飢饉ききんのつもりかい。
起おきておれに手て伝つわないか。」見みるとそれは茶ちやいろなきの
こしやっぽをかぶって外がい套とうにすぐシャツを着きた男おとこで、何なにか
針はり金がねでこさえたものをぶらぶら持もっているのですた。

「もう飢饉ききんは過すぎたの？ 手て伝つえって何なにを手て伝つうの？」
ブドリがききました。

「網掛けさ。」

「ここへ網を掛けるの？」

「掛けるのさ。」

「網をかけて何にするの？」

「てぐすを飼うのさ。」見るとすぐブドリの前の栗の木に、

二人の男がはしごをかけてのぼっていて、一生けん命何か

網を投げたり、それを操ったりしているようでしたが、網

も糸もいっこう見えませんでした。

「あれでてぐすが飼えるの？」

「飼えるのさ。うるさいこどもだな。おい、縁起でもな

いぞ。てぐすも飼えないところにどうして工場なんか建て

るんだ。飼^かえるともさ。現^{げん}におれをはじめたくさんものが、それでくらしを立て^たてているんだ。」

ブドリはかすれた声^{こゑ}で、やっと、「そうですねか。」と言^いいました。

「それにこの森^{もり}は、すっかりおれが買^かってあるんだから、ここで手^て伝^だうならいいが、そうでもなければどこかへ行^いってもらいたいな。もっともお前^{まえ}はどこへ行^いったって食^くうものもなからうぜ。」

ブドリは泣^なき出^だしそうになりましたが、やっとこらえて言^いいました。

「そんなら手^て伝^だうよ。けれどもどうして網^{あみ}をかけるの?」

「それはもちろん教えてやる。こいつをね。」男は、手に持った針金の籠のようなものを両手で引き伸ばしました。

「いいか。こういう具合にやるとはしごになるんだ。」

男は大またに右手の栗の木に歩いて行って、下の枝に引っ掛けました。

「さあ、今度はおまえが、この網をもって上へのぼって行くんだ。さあ、のぼってごらん。」

男は変なまりのようなものをブドリに渡しました。ブドリはしかたなくそれをもつてはしごにとりついて登って行きました。はしごの段々がまるで細くて手や足に食いこんでちぎれてしまひそうでした。

「もつと登るんだ。もつと、もつとさ。そしたらさつき
のまりを投げてごらん。栗の木を越すようにさ。そいつを
空へ投げるんだよ。なんだい、ふるえてるのかい。いくじ
なしだなあ。投げるんだよ。投げるんだよ。そら、投げる
んだよ。」

ブドリはしかたなく力いっぱいそれにそれを青空に投げたと
思いましたら、にわかにお日さまがまっ黒に見えて逆しま
に下へおちました。そしていつか、その男に受けとめられ
ていたのでした。男はブドリを地面におろしながらぶりぶ
りおこり出しました。

「お前もいくじのないやつだ。なんとというふにやふにや

だ。おれが受け止めてやらなかつたらお前は今ごろは頭が
はじけていたろう。おれはお前の命の恩人だぞ。これから
は、失礼なことを言つてはならん。ところで、さあ、こん
どはあっちの木へ登れ。も少したつたらごはんもたべさせ
てやるよ。」男はまたブドリへ新しいまりを渡しました。
ブドリははしごをもつて次の木へ行つてまりを投げまし
た。

「よし、なかなかじょうずになった。さあ、まりはたく
さんあるぞ。なまけるな。木も栗の木ならどれでもいいん
だ。」

男はポケットから、まりを十ばかり出してブドリに渡す

と、すたすた向こうへ行ってしまうました。ブドリはまた三つばかりそれを投げましたが、どうしても息がはあはあして、からだがだるくてたまらなくなりました。もう家へ帰ろうと思つて、そつちへ行つて見ますと、おどろいたことには、家にはいつか赤い土管の煙突がついて、戸口には、「イーハトーヴでぐす工場」という看板がかかっているのでした。そして中からたばこをふかしながら、さっきの男が出て来ました。

「さあごども、たべものをもつてきてやったぞ。これを食べて暗くならないうちにもう少しかせぐんだ。」

「ぼくはもういやだよ、うちへ帰るよ。」

「うちっていうのはあすこか。あすこはおまえのうちじゃない。おれのでぐす工場だよ。あの家もこの辺の森もみんなおれが買ってあるんだからな。」

ブドリはもうやけになって、だまってその男のよこした蒸しパンをむしゃむしゃたべて、またまりを十ばかり投げました。

その晩ブドリは、昔のじぶんのうち、いまはでぐす工場になってい建物のすみに、小さくたってねむりました。

さっきの男は、三四人の知らない人たちとおそくまで炉ばたで火をたいて、何か飲んだりしゃべったりしていました。次の朝早くから、ブドリは森に出て、きのうのように

はたらきました。

それから一月ばかりたって、森じゅうの栗の木に網がかかってしまいますと、てぐす飼いの男は、こんどは栗のよ
うなものがいっぱいいた板きれを、どの木にも五六枚ず
つつるさせました。そのうちに木は芽を出して森はまっ青
になりました。すると、木につるした板きれから、たくさ
んの小さな青じろい虫が糸をつたって列になって枝へはい
あがって行きました。

ブドリたちはこんどは毎日薪とりをさせられました。そ
の薪が、家のまわりに小山のように積み重なり、栗の木が
青じろいひものかたちの花を枝いちめんにつけるころにな

りますと、あの板からはいあがって行った虫も、ちようど栗の花のような色とかたちになりました。そして森じゅうの栗の葉は、まるで形もなくその虫に食い荒らされてしまいました。

それからまもなく、虫は大きな黄いろな繭を、網の目ごとにかけてはじめました。

するとてぐす飼いの男は、狂気のようになって、ブドリたちをしかりとばして、その繭を籠に集めさせました。それをこんどは片っぱしから鍋に入れてぐらぐら煮て、手で車をまわしながら糸をとりました。夜も昼もがらがらから三つの糸車をまわして糸をとりました。こうしてこし

らえた黄いろな糸が小屋に半分ばかりたまったころ、外に置いた繭からは、大きな白い蛾がぼろぼろ飛びだしはじめました。てぐす飼いの男は、まるで鬼みたいな顔つきになって、じぶんも一生けん命糸をとりましたし、野原のほうからも四人の人を連れてきて働かせました。けれども蛾のほうは日ましに多く出るようになって、しまいには森じゅうまるで雪でも飛んでいるようになりました。するとある日、六七台の荷馬車が来て、いままでにできた糸をみんなつけて、町のほうへ帰りはじめました。みんなも一人ずつ荷馬車について行きました。いちばんしまいの荷馬車がたったとき、てぐす飼いの男が、ブドリに、

「おい、お前の来春まで食うくらいのものは家の中に置いてやるからな。それまでここで森と工場の番をしているんだぞ。」

と言って、変にやにやしながら荷馬車についてさっさと行ってしまいました。

ブドリはぼんやりあとへ残りました。うちの中はまるできたなくてあらしのあとのようでしたし、森は荒れはてて山火事にもあったようでした。ブドリが次の日、家のなかやまわりを片付けはじめましたら、てぐす飼いの男がいつもすわっていた所から古いボール紙の箱を見つけてました。中には十冊ばかりの本がぎっしりはいってありました。

開いて見ると、てぐすの絵や機械の図がたくさんある、まるで読めない本もありましたし、いろいろな木や草の図と名前の書いてあるものもありました。

ブドリはいっしょうけんめい、その本のまねをして字を書いたり、図をうつしたりしてその冬を暮らしました。

春になりますと、またあの男が六七人のあたらしい手下を連れて、たいへん立派ななりをしてやって来ました。そして次の日からすっかり去年のような仕事はじまりました。

そして網はみんなかかり、黄いろな板もつるされ、虫は枝にはい上がり、ブドリたちはまた、薪作りにかかること

になりました。ある朝ブドリたちが薪をつくっていましたら、にわかにくらぐらうと地震がはじまりました。それからずうっと遠くでどーんという音がしました。

しばらくたつと日が変わにくらくなり、こまかな灰がばさばさばさ降って来て、森はいちめにまっ白になりました。ブドリたちがあきれて木の下にしゃがんでいましたら、てぐす飼いの男がたいへんあわててやって来ました。

「おい、みんな、もうだめだぞ。噴火だ。噴火がはじまつたんだ。てぐすはみんな灰をかぶって死んでしまった。みんな早く引き上げてくれ。おい、ブドリ、お前ここにいたかったらいてもいいが、こんどはたべ物は置いてやらない

ぞ。それにここにいてもあぶないからな。お前まえも野原のほらへ出でて何かなにかせぐほうがいいぜ。」

そう言いったかと思おもうと、もうどんどん走はしって行いってしまいました。ブドリが工場じゅうぎやうへ行いって見たみたときは、もうだれもおりませんでした。そこでブドリは、しょんぼりとみんなの足跡あしあとのついた白しろい灰はいをふんで野原のほらのほうへ出でて行いきました。

三 沼ばたけ

ブドリは、いっばいに灰をかぶった森の間を、町のほうへ半日歩きつづけました。灰は風の吹くたびに木からばさばさ落ちて、まるでけむりか吹雪のようでした。けれどもそれは野原へ近づくほど、だんだん浅く少なくなつて、ついに木も緑に見え、みちの足跡も見えないくらいになりました。

とうとう森を出切ったとき、ブドリは思わず目をみはりました。野原は目の前から、遠くのまっしろな雲まで、美

しい桃ももいろと緑みどりと灰はいいろのカードでできているようでした。そばへ寄よって見みると、その桃ももいろなものには、いちめんせいひくの低はない花さが咲さいていて、蜜蜂みつばちがいそがしく花はなから花はなをわたってあるみどりいていましたし、緑みどりいろなものには小ちいさな穂ほを出だして草くさがぎっしりはえ、灰はいいろなのは浅あさい泥どろの沼ぬまでした。そしてどれも、低ひくい幅はばのせまい土手どてでくぎられ、人ひとは馬うまを使つかってそれを掘ほり起おこしたりかき回まわしたりしてはたらいっていました。

ブドリがその間あいだを、しばらく歩あるいて行いきますと、道みちのまなかん中ふたりに二人ひとの人が、大おお声こえで何なにかけんかでもするよういに言い合あっていました。右側みぎがわのほうのひげの蓄あかい人ひとが言いいました。

「なんでもかんでも、おれは山師張るときめた。」
すると一人の白い笠をかぶった、せいの高いおじいさんが言いました。

「やめろって言ったらやめるもんだ。そんなに肥料うんと入れて、藁はとれるたって、実は一粒もとれるもんでない。」

「うんにや、おれの見込みでは、ことしは今までの三年分暑いに相違ない。一年で三年分とって見せる。」

「やめろ。やめろ。やめろったら。」

「うんにや、やめない。花はみんな埋めてしまったから、こんどは豆玉を六十枚入れて、それから鶏の糞、百駄入れ

んにかわるがわる言いながら、さっさと先に立って歩きました。あとではおじいさんが、

「年寄りの言うこと聞かないで、いまに泣くんだな。」とつぶやきながら、しばらくこっちを見送っているようすでした。

それからブドリは、毎日毎日沼ばたけへは行って馬を使って泥をかき回しました。一日ごとに桃いろのカードも緑のカードもだんだんつぶされて、泥沼に変わるのです。馬はたびたびしゃっと泥水をはねあげて、みんなの顔へ打ちつけました。一つの沼ばたけがすめばすぐ次の沼ばたけへはいるのです。一日がとても長くて、しまいには歩

いているのかどうかもわからなくなったり、泥が飴のよう
な、水がスープのような気がしたりするのでした。風が何
べんも吹いて来て、近くの泥水に魚のうろこのような波を
たて、遠くの水をブリキいろにして行きました。そらでは、
毎日甘くすっぱいような雲が、ゆっくりゆっくりながれて
いて、それがじつにうらやましそうに見えました。

こうして二十日ばかりたちますと、やっと沼ばたけは
すっかりどろどろになりました。次の朝から主人はまるで
気が立って、あちこちから集まって来た人たちといっしょ
に、その沼ばたけに緑いろの槍のようなオリザの苗をいち
めん植えました。それが十日ばかりで済むと、今度はブド

りたちを連れて、今まで手伝ってもらった人たちの家へ
毎日働きにでかけました。それもやっと一まわり済むと、
こんどはまたじぶんの沼ばたけへ戻って来て、毎日毎日
草取りをはじめました。ブドリの主人の苗は大きくなって
まるで黒いくらいなのに、となりの沼ばたけはぼんやりし
たうすい緑いろでしたから、遠くから見ても、二人の沼ば
たけははつきり境まで見わかりました。七日ばかりで草取
りが済むとまたほかへ手伝いに行きました。

ところがある朝、主人はブドリを連れて、じぶんの沼ば
たけを通りながら、にわか「あっ」と叫んで棒立ちになっ
てしまいました。見るとくちびるのいろまで水いろになっ

て、ぼんやりまっすぐを見つめているのです。

「病気が出たんだ。」主人がやっと言いました。

「頭でも痛いんですか。」ブドリはききました。

「おれでないよ。オリザよ。それ。」主人は前のオリザの株を指さしました。ブドリはしゃがんでしらべてみますと。なるほどどの葉にも、いままで見たことのない赤い点々がついていました。主人はだまってしおしおと沼ばたけを—まわりしましたが、家へ帰りはじめました。ブドリも心配してついて行きますと、主人はだまって巾を水でしぼって、頭にのせると、そのまま板の間に寝てしまいました。するとまもなく、主人のおかみさんが表からかけ込んで来まし

た。

「オリザへ病びょう氣きが出でたというのはほんとうかい。」

「ああ、もうだめだよ。」

「どうにかならないのかい。」

「だめだろう。すっかり五ご年ねん前まえのとおりだ。」

「だから、あたしはあんたに山やま師しをやめろといったんじゃないか。おじいさんもあんたにとめたんじゃないか。」

おかみさんはおろおろ泣なきはじめました。すると主人しゅじんがにわかに元げん氣きになってむっくり起おき上あがりました。

「よし。イーハトーヴの野の原はらで、指ゆび折おり数かずえられる大だい百ひゃく姓しょうのおれが、こんなことことで参まゐるか。よし。来らい年ねんこそ

やるぞ。ブドリ、おまえおれのうちへ来てから、まだ一晩ひとばんも寝ねたいくらい寝たことがないな。さあ、五日いつかでも十日とおかでもいいから、ぐうというくらい寝てしまえ。おれはそのあとで、あすこの沼ぬまばたけでおもしろい手品てずまをやって見せるからな。その代かわりことしの冬ふゆは、家いえじゆうそばばかり食くうんだぞ。おまえそばはすきだろうが。」それから主人しゅじんはさっさと帽子ぼうしをかぶって外そとへ出て行いってしまいました。

ブドリは主人しゅじんに言いわれたとおりに納屋なやへはいって眠ねむろうと思おもいましたが、なんだかやっぱり沼ぬまばたけが苦くになっってしかたないので、またのろのろそっちへ行いって見みました。するといつ来きていたのか、主人しゅじんがたった一人腕組ひとりでぐみをして

土手に立っておりました。見ると沼ばたけには水がいつぱいで、オリザの株は葉をやっと出しているだけ、上にはぎらぎら石油が浮かんでいるのでした。主人が言いました。

「いまおれ、この病気を蒸し殺してみるところだ。」

「石油で病気の種が死ぬんですか。」とブドリがききますと、主人は、

「頭から石油につけられたら人だって死ぬだ。」と言いながら、ほうと息を吸って首をちぢめました。その時、水下の沼ばたけの持ち主が、肩をいからして、息を切ってかけて来て、大きな声でどなりました。

「なんだって油など水へ入れるんだ。みんな流れて来て、

おれのほうへはいってるぞ。」

主人は、やけくそに落ちついて答えました。

「なんだって油など水へ入れるったって、オリザへ病気がついたから、油など水へ入れるのだ。」

「なんだってそんならおれのほうへ流すんだ。」

「なんだってそんならおまえのほうへ流すったって、水は流れるから油もついて流れるのだ。」

「そんならなんだっておれのほうへ水こないように水口とめないんだ。」

「なんだっておまえのほうへ水行かないように水口とめないかったって、あすこはおれのみな口でないから水とめ

ないのだ。」

となりの男は、かんかんおこってしまってもう物も言えず、いきなりがぶがぶ水へは行って、自分の水口に泥を積みあげはじめました。主人はにやりと笑いました。

「あの男むずかしい男でな。こっちで水をとめると、とめたといっておこるからわざと向こうにとめさせたのだ。あすこさえとめれば今夜じゅうに水はすっかり草の頭までかかるからな、さあ帰ろう。」主人はさきに立ってすたすた家へあるきはじめました。

次の朝ブドリはまた主人と沼ばたけへ行ってみました。主人は水の中から葉を一枚とってしきりにしらべていまし

たが、やっぱり浮かない顔でした。その次の日もそうでした。その次の日もそうでした。その次の日もそうでした。その次の日もそうでした。その次の朝、とうとう主人は決心したように言いました。

「さあブドリ、いよいよここへ蕎麦播きだぞ。おまえあすこへ行つて、となりの水口こわして来い。」

ブドリは、言われたとおりにこわして来ました。石油のはいった水は、恐ろしい勢いでとなりの田へ流れて行きます。きつとまたおこってくるなと思つていますと、ひるごろ例のとなりの持ち主が、大きな鎌をもつてやってきました。

「やあ、なんだってひとの田へ石油ながすんだ。」
主人がまた、腹の底から声を出して答えました。

「石油せきゆながれればなんだって悪いわるんだ。」

「オリザみんな死ぬしでないか。」

「オリザみんな死ぬしか、オリザみんな死しなないか、まずおれの沼ぬまばたけのオリザ見みなよ。きょうで四日頭よつかあたまから石油せきゆかぶせたんだ。それでもちゃんとおりのとおりでないか。赤あかくなったのは病氣びやうきのためで、勢いきおいのいいのは石油せきゆのためなんだ。おまえの所ところなど、石油せきゆがただオリザの足あしを通とおるだけでないか。かえっていいかもしれないんだ。」

「石油せきゆこやしになるのか。」向むここの男おとこは少すこし顔かおいろをやわらげました。

「石油せきゆこやしになるか、石油せきゆこやしにならないか知らしな

いが、とにかく石油は油は油でないか。」

「それは石油は油だな。」男はすっかりきげんを直してわらいました。水はどんどん退き、オリザの株は見る見る根もとまで出て来ました。すっかり赤い斑ができて焼けたようになっっています。

「さあおれの所ではもうオリザ刈りをやるぞ。」

主人は笑いながら言つて、それからブドリといっしよに、片っぱしからオリザの株を刈り、跡へすぐ蕎麦を播いて土をかけて歩きました。そしてその年はほんとうに主人の言つたとおり、ブドリの家では蕎麦ばかり食べました。次の春になると主人が言いました。

「ブドリ、ことしは沼ばだけは去年よりは三分の一減ったからな、仕事はよほどらくだ。そのかわりおまえは、おれの死んだ息子の読んだ本をこれから一生けん命勉強して、いままでおれを山師だといってわらったやつらを、あつと言わせるような立派なオリザを作るくふうをしてくれ。」

そして、いろいろな本を一山ブドリに渡しました。ブドリは仕事のひまに片っぱしからそれを読みました。ことにその中の、クーボーという人の物の考え方を教えた本はおもしろかったので何べんも読みました。またその人が、イーハトーヴの市で一か月の学校をやっているのを知って、たいへん行って習いたいと思ったりしました。

そして早くもその夏、ブドリは大きな手柄をたてました。それは去年と同じころ、またオリザに病気ができかかったのを、ブドリが木の灰と食塩を使って食いとめたのでした。そして八月のなかばになると、オリザの株はみんなそろって穂を出し、その穂の一枝ごとに小さな白い花が咲き、花はだんだん水いろの粉にかわって、風にゆらゆら波をたてるようになりまし。主人はもう得意の絶頂でした。来る人ごとに、

「なんの、おれも、オリザの山師で四年しくじったけれども、ことは一度に四年分とれる。これもまたなかなかいいもんだ。」などと行って自慢するのです。

ところがその次の年はそうは行きませんでした。植え付けのころからさっぱり雨が降らなかつたために、水路はかわいてしまい、沼にはひびが入って、秋のとりいれはやつと冬じゅう食べるくらいでした。来年こそと思つていましたが、次の年もまた同じようなひでりでした。それからも、来年こそ来年こそと思ひながら、ブドリの主人は、だんだんこやしを入れることができなくなり、馬も売り、沼はたけもだんだん売つてしまつたのでした。

ある秋の日、主人はブドリにつらそうに言いました。

「ブドリ、おれももとはイーハトーヴの老百姓だつたし、ずいぶんかせいでも来たのだが、たびたびの寒さと旱魃の

ために、いまでは沼ぬまばたけも昔むかしの三分さんぶんの一いちになつてしまつたし、来年らいねんはもう入れいるこやしもないのだ。おれだけでない。来年らいねんこやしを買かつて入れいれる人ひとつたらもうイーハトーヴにも何人なんにんもないだろう。こういうあんばいでは、いつになつておまえにはたらいでもらつた礼れいをするというあてもない。おまえも若い働わか はたらき盛ぎかりを、おれのところで暮くらしてしまつてはあんまり氣きの毒どくだから、済すまないがどうかこれを持もつて、どこへでも行いつていい運うんを見みつけてくれ。」そして主人しゅじんは、一ひとふくろのお金かねと新あたらしい紺こんで染そめた麻あさの服ふくと赤皮あかかわの靴くつとをブドリにくれました。

ブドリはいまままでの仕事しごとのひどかつたことも忘れてし

まっつて、もう何もいら^{なに}ないから、ここで働^{はたら}いていた^いとも
思^{おも}いましたが、考^{かん}えてみると、い^いてもや^やっぱ^り仕^し事^{ごと}もそ^そん
な^なにない^いので、主^{しゅ}人^{じん}に何^{なん}べ^んも何^{なん}べ^んも礼^{れい}を言^いって、六^{ろく}年^{ねん}
の^{あい}間^だはた^らいた^ぬ沼^まば^たけと主^{しゅ}人^{じん}に別^{わか}れて、停^{てい}車^{しや}場^ばを^さして
歩^{ある}き^だし^ました[。]。

四 クーボー大博士だいはかせ

ブドリは二時間ばかり歩いて、停車場へ来ました。それから切符を買って、イーハトーヴ行きいの汽車きしゃに乗りました。汽車はいくつもの沼ぬまばたけをどんどんどんうしろへ送りながら、もう一散いちさんに走りはしました。その向むこうには、たくさんくろの黒い森もりが、次つぎから次つぎと形かたちを変かえて、やっぱりうしろのほうへ残のこされて行くのでした。ブドリはいろいろな思おもいで胸むねがいっぱいでした。早くイーハトーヴの市しに着ついて、あの親切しんせつな本ほんを書かいたクーボーという人ひとに会あい、できるな

ら、働はたらきながら勉べん強きやうして、みんながあんなにつらい思おもいを
しないで沼ぬまばたけを作つくれるよう、また火か山ざんの灰はいだのひでり
だの寒せむさだのを除のぞくくふうをしたいと思いますおもうと、汽き車しやさえま
どろこくってたまらないくらいでした。汽き車しやはその日ひのひ
るすぎ、イーハトーヴの市しに着つきました。停てい車しや場ばを一ひと足あし出で
ますと、地じ面めんの底そこから、何なにかのんのんわくようなひびきや
どんよりとしたくらい空くう気き、行いつたり来きたりするたくさん
の自じ動どう車しやに、ブドリはしばらくぼうとしてつっ立たってしま
いました。やっとなな気きをとりにおして、そこの人ひとにクーパー
博士はかせの学が校こうへ行いくみちをたずねました。するとだれへきい
ても、みんなブドリのあまりまじめな顔かおを見みて、吹ふき出だし

そうにしながら、

「そんな学校がっこうは知らんね。」とか、

「もう五六丁ごろうちやう行ってきいてみな。」とかいうのでした。そしてブドリがやっと学校がっこうをさがしあてたのはもう夕方ゆうがたちか近くでした。その大きなおおこわれかかった白い建物たてものの二階にかいで、だれか大きな声こえでしゃべっていました。

「今日こんにちは。」ブドリは高くたか叫さけびました。だれも出でてきませませんでした。

「今日こんにちはあ。」ブドリはあらん限りかぎ高くたか叫さけびました。するとすぐ頭あたまの上うへの二階にかいの窓まじから、大きな灰おほいろの顔かおが出でて、めがねが二つふたぎらりと光ひかりました。それから、

「今授業中だよ、やかましいやつだ。用があるならはいつて来い。」とどなりつけて、すぐ顔を引っ込めますと、中ではおおぜいでどっと笑い、その人はかまわずまた何か大声でしゃべっています。

ブドリはそこで思い切って、なるべく足音をたてないように二階にあがって行きますと、階段のつき当たりの扉があいていて、じつに大きな教室が、ブドリのまっ正面にあられました。中にはさまざまな服装をした学生がぎっしりです。向こうは大きな黒い壁になっていて、そこにたくさんさんの白い線が引いてあり、さっきのせいの高い目がねをかけた人が、大きな櫓の形の模型をあちこち指さしながら、

さっきのままの高い声で、みんなに説明しておりました。

ブドリはそれを一見みると、ああこれは先生の本に書いてあった歴史の歴史ということの模型だなと思いました。先生は笑いながら、一つのとつてを回しました。模型はがちつと鳴って奇体な船のような形になりました。またがちつととつてを回すと、模型はこんどは大きなむかでのような形に変わりました。

みんなはしきりに首をかたむけて、どうもわからんというふうにしていました。ブドリにはただおもしろかったです。

「そこでこういう図ができる。」先生は黒い壁へ別の込み

入った図をどどん書きました。

左手にもチョークをもつて、さっさと書きました。学生たちもみんな一生けん命そのまねをしました。ブドリもふところから、いままで沿ばただけで持っていたきたない手帳を出して図を書きとりました。先生はもう書いてしまつて、壇の上にあつすぐに立つて、じろじろ学生たちの席を見まわしています。ブドリも書いてしまつて、その図を縦横から見ていますと、ブドリのとなりで一人の学生が、「あああ。」とあくびをしました。ブドリはそつとききましました。

「ね、この先生はなんて言つんですか。」

すると学生はばかにしたように鼻でわらいながら答えました。

「クーボー大博士さ、お前知らなかったのかい。」それからじろじろブドリのようすを見ながら、

「はじめから、この図なんか書けるもんか。ぼくでさえ同じ講義をもう六年もきいているんだ。」

と言って、じぶんのノートをふところへしまってしまった。その時教室に、ぱつと電燈がつかまりました。もう夕方だったのです。大博士が向こうで言いました。

「いまや夕べははるかにきたり、拙講もまた全課をおえた。諸君のうちの希望者は、けだしいつもの例により、そ

のノートをば拙者に示し、さらに数箇の試問を受けて、所属を決すべきである。」学生たちはわあと叫んで、みんなばたばたノートをとりました。それからそのまま帰ってしまうものが大部分でしたが、五六十人は一列になって大博士の前をとおりながらノートを開いて見せるのでした。すると大博士はそれをちよつと見て、一言か二言質問をして、それから白墨でえりへ、「合」とか、「再来」とか、「奮励」とか書くのでした。学生はその間、いかにも心配そうに首をちぢめているのでしたが、それからそつと肩をすぼめて廊下まで出て、友だちにそのしるしを読んでもらって、よろこんだりしよげたりするものでした。

ぐんぐん試験しけんが済すんで、いよいよブドリ一人ひとりになりました。ブドリがその小ちいさなきたない手帳てちようを出だしたとき、クーボー大博士だいはかせは大きおおなあくびをやりながら、かがんで目めをぐっと手帳てちようにつけるようにしましたので、手帳てちようはあぶなく大博士だいはかせに吸すい込まこれそうになりました。

ところが大博士だいはかせは、うまそうにこくつと一ひとつ息いきをして、「よろしい。この図ずは非常ひじょうに正ただしくできている。そのほかのところは、なんだ。ははあ、沼ぬまばたけのこやしのこと、馬うまのたべ物のことかね。では問題もんだいに答こたえなさい。工場こうじょうの煙突えんとつから出るでるけむりには、どういう色いろの種類しゆるいがあるか。」ブドリは思おもわず大おお声こゑに答こたえました。

「黒、褐、黄、灰、白、無色。それからこれらの混合です。」
大博士はわらいました。

「無色のけむりはたいへんいい。形について言いたまえ。」

「無風で煙が相当あれば、たての棒にもなりますが、さきはだんだんひろがります。雲の非常に低い日は、棒は雲までのぼって行って、そこから横にひろがります。風のある日は、棒は斜めになります。その傾きは風の程度に従います。波やいくつもきれになるのは、風のためにもよりませんが、一つはけむりや煙突のもつ癖のためです。あまり煙の少ないときは、コルク抜き抜きの形にもなり、煙も重いガスがまじれば、煙突の口から房になって、一方ないし四方に

おちることもありません。」

大博士はまたわらいました。

「よろしい。きみはどういう仕事をしているのか。」

「仕事をみつけに来たんです。」

「おもしろい仕事がある。名刺をあげるから、そこへすぐ行きなさい。」博士は名刺をとり出して、何かするする書き込んでブドリにくれました。ブドリはおじぎをして、戸口を出て行こうとしますと、大博士はちよつと目で答えて、

「なんだ、ごみを焼いてるのかな。」と低くつぶやきながら、テーブルの上にあった鞆に、白墨のかけらや、はんげちや

本^{ほん}や、みんないっしょに投^なげ込^こんで小^こわきにかかえ、さつき顔^{かお}を出^だした窓^{まど}から、プイツと外^{そと}へ飛^とび出^だしました。びっくりしてブドリが窓^{まど}へかけよって見^みますと、いつか大^{だい}博^{はかせ}士^しは玩具^{おもちゃ}のような小^{ちい}さな飛^ひ行^{こう}船^{せん}に乘^のって、じぶんでハンドルをとりながら、もううす青^{あお}いもやのこめた町^{まち}の上^{うへ}を、まっすぐに向^むこうへ飛^とんでいるのでした。ブドリがいよいよあきて見^みていますと、まもなく大^{だい}博^{はかせ}士^しは、向^むこうの大^{おお}きな灰^{はい}いろの建^{たて}物^{もの}の平^{ひら}屋^や根^ねに着^ついて、船^{ふね}を何^{なに}かかぎのようなものにつなぐと、そのままぼろっと建^{たて}物^{もの}の中^{なか}へはいって見^みえなくなってしまうました。

五 イーハトローヴ火山局かぎんきよく

ブドリが、クーボー大博士だいはかせからもらった名刺めいしのあて名なを
たずねて、やっと着ついたところは大きな茶ちやいろの建物たてももので、
うしろには房ふさのような形かたちをした高い柱たか はしらが夜のそらにくつき
り白しろく立たっておりました。ブドリは玄関げんかんに上あがって呼び鈴よ りん
を押おしますと、すぐ人ひとが出て来きて、ブドリの出だした名刺めいしを
受け取りう と、一ひと目見みると、すぐブドリを突つき当あたりの大きな
室へやへ案内あんないしました。

そこにはいままでに見みたこともないような大きなテーブ

ルがあつて、そのまん中に一人の少し髪の毛の白くなった人のよさそうな立派な人が、きちんとすわって耳に受話器をあてながら何か書いていました。そしてブドリのはいつて来たのを見ると、すぐ横の椅子を指さしながら、また続けて何か書きつけています。

その室の右手の壁いっばいに、イーハトーヴ全体の地図が、美しく色どった大きな模型に作ってあつて、鉄道も町も川も野原もみんな一目でわかるようになっており、そのまん中を走るせぼねのような山脈と、海岸に沿って縁をとったようになっている山脈、またそれから枝を出して海の中に点々の島をつくっている一列の山々には、みんな赤

や橙^{だいだい}や黄^きのあかりがついていて、それがかわるがわる色^{いろ}が
変^かわったりジーンと蝉^{せみ}のように鳴^なったり、数字^{すうじ}が現^{あら}われたり
消^きえたりしているのです。下^{した}の壁^{かべ}に添^そった棚^{たな}には、黒^{くろ}い夕
イライターのようなものが三列^{さんれつ}に百^{ひゃく}でもきかないくらい
並^{なら}んで、みんなしずかに動^{うご}いたり鳴^なったりしているのです
た。ブドリがわれを忘^{わす}れて見^みとれておりますと、その人^{ひと}が
受話器^{じゆわき}をこっと置^おいて、ふところから名刺^{めいし}入れを出^だして、
一枚^{いちまい}の名刺^{めいし}をブドリに出^だしながら「あなたが、グスコープ
ドリ君^{くん}ですか。私^{わたし}はこういふものです。」と言^いいました。
見^みると、「イーハトーヴ火山^{かざん}局^{きょく}技師^{ぎし}。ペンネンナム」と書^か
いてありました。その人^{ひと}はブドリの挨拶^{あいさつ}になれないでもじ

もじしているのを見ると、重ねて親切に言いました。

「さっきクーボー博士から電話があつたのでお待ちして
いました。まあこれから、ここで仕事をしながらしっかりと
勉強してごらん下さい。この仕事は、去年はじまったばかり
ですが、じつに責任のあるもので、それに半分はいつ
噴火するかわからない火山の上で仕事するものなのです。
それに火山の癖というものは、なかなか学問でわかること
ではないのです。われわれはこれからよほどしっかりとやら
なければならんです。では今晚はあつちにあなたの泊ま
るところがありますから、そこでゆっくりお休み下さい。
あしたこの建物じゅうをすっかり案内しますから。」

次の朝、ブドリはペンネン老技師に連れられて、建物のなかを一々つれて歩いてもらい、さまざまの機械やしかけを詳しく教わりました。その建物のなかのすべての器械はみんなイーハトーヴじゅうの三百幾つかの活火山や休火山に続いていて、それらの火山の煙や灰を噴いたり、熔岩を流したりしているようすはもちろん、みかけはじつとしている古い火山でも、その中の熔岩やガスのもようから、山の形の変わりようまで、みんな数字になったり図になったりして、あらわれて来るのでした。そしてはげしい変化のあるたびに、模型はみんな別々の音で鳴るのでした。

ブドリはその日からペンネン老技師について、すべての

器械きかいの扱あつかい方かたや観測かんそくのしかたを習ならい、夜よるも昼ひるも一いっしん心に働はたらいたり勉強べんきやうしたりしました。そして二年にねんばかりたちますと、ブドリはほかの人ひとたちといっしょにあちこちの火山かざんへ器械きかいを据すえ付けつけに出だされたたり、据すえ付けつてある器械きかいの悪わるくなつたのを修繕しゆつぜんにやられたりもするようになりましたので、もうブドリにはイーハトーヴの三百幾さんびやくいくつの火山かざんと、その働はたらき具合ぐあいは掌たなごころの中なかにあるようにわかつて来きました。

じつにイーハトーヴには、七十幾ななじゅういくつの火山かざんが毎日煙まいにちけむりをあげたり、熔岩ようがんを流ながしたりしているのでしたし、五十幾ごじゅういくつかの休火山きゆうかざんは、いろいろなガスを噴ふいたり、熱あつい湯ゆを出だしたりしていました。そして残りのこの百六七十ひゃくろくしちじゅうの死火山しかざんのうちに

も、いつまた何をはじめるかわからないものもあるのでした。

ある日ブドリが老技師とならんで仕事をしておりますと、にわかにはサンムトリという南のほうの海岸にある火山が、むくむく器械に感じ出して来ました。老技師が叫びました。

「ブドリ君。サンムトリは、けさまで何もなかったね。」
「はい、いままでサンムトリのはたらいたのを見たことがありません。」

「ああ、これはもう噴火が近い。けさの地震が刺激したのだ。この山の北十キロのところにはサンムトリの市があるのだ。」

る。今度爆発すれば、たぶん山は三分の一、北側をはねとばして、牛やテーブルぐらいの岩は熱い灰やガスといっしょに、どしどしサンムトリ市におちてくる。どうでも今のうちに、この海に向いたほうへボーリングを入れて傷口をこさえて、ガスを抜くか熔岩を出させるかしなければならぬ。今すぐ二人で見に行こう。」二人はすぐにしたくして、サンムトリ行きの汽車に乗りました。

六 サンムトリ火山

二人は次の朝、サンムトリの市に着き、ひるごろサンムトリ火山の頂近く、観測器械を置いてある小屋に登りました。そこは、サンムトリ山の古い噴火口の外輪山が、海のほうへ向いて欠けた所で、その小屋の窓からながめますと、海は青や灰いろの幾つもの縞になつて見え、その中を汽船は黒いけむりを吐き、銀いろの水脈を引いていくつもすべっているのです。

老技師はしずかにすべての観測機を調べ、それからブド

りに言いました。

「きみはこの山はあと何日ぐらいで噴火すると思うか。」

「二月はもたないと思います。」

「二月はもたない。もう十日ももたない。早く工作してしまわないと、取り返しをつかないことになる。私はこの山の海に向いたほうでは、あすこがいちばん弱いと思う。」
老技師は山腹の谷の上のうす緑の草地を指さしました。そこを雲の影がしずかに青くすべっているのです。

「あすこには熔岩の層が二つしかない。あとは柔らかな火山灰と火山礫の層だ。それにあすこまでは牧場の道も立派にあるから、材料を運ぶことも造作ない。ぼくは

「工作隊を申請しよう。」

老技師は忙しく局へ発信をはじめました。その時足の下では、つぶやくようなかすかな音がして、観測小屋はしばらくぎしぎしきしみました。老技師は器械をはなれました。「局からすぐ工作隊を出すそうだ。工作隊といっても半分決死隊だ。私はいままで、こんな危険に迫った仕事をしたことがない。」

「十日のうちにできるでしょうか。」

「きつとできる。装置には三日、サンムトリ市の発電所から、電線を引いてくるには五日かかるな。」

技師はしばらく指を折って考えていましたが、やがて

安心あんしんしたようにまたしずかに言いいました。

「とにかくブドリ君くん。一つ茶ちやをわかつて飲のもうではないか。あんまりいい景色けしきだから。」

ブドリは持もって来たきアルコールランプに火ひを入れて、茶ちやをわかしはじめました。空そらにはだんだん雲くもが出て、それに日ひももう落おちたのか、海うみはさびしい灰はいいろに変わかり、たくさんひの白しろい波なみがしらは、いっせいに火山かざんのすそに寄よせて来きました。

ふとブドリはすぐ目めの前まえに、いつか見たみことのあるおかしな形かたちの小ちいさな飛行船ひこうせんが飛とんでいるのを見みつけました。老技師ろうぎしもはねあがりました。

「あ、クーボー君^{くん}がやって来た^き。」ブドリも続^{つづ}いて小屋^{こや}を
とび出^だしました。飛行船^{ひこうせん}はもう小屋^{こや}の左側^{ひだりがわ}の大き^{おお}な岩^{いわ}の壁^{かべ}
の上^{うえ}にとまって、中^{なか}からせいの高^{たか}いクーボー大博士^{だいほかせ}がひら
りと飛^とびおりていました。博士^{はかせ}はしばらくその辺^{へん}の岩^{いわ}の大^{おお}
きなさけ目^めをさがしていましたが、やっとそれを見^みつけた
と見^みえて、手早^{てはや}くねじをしめて飛行船^{ひこうせん}をつなぎました。
「お茶^{ちや}をよばれに來^きたよ。ゆるるかい。」大博士^{だいほかせ}はにやに
やわらって言^いいました。老技師^{ろうぎし}が答^{こた}えました。
「まだそんなでない。けれども、どうも岩^{いわ}がぼろぼろ上^{うえ}
から落^おちているらしいんだ。」

ちようどその時^{とき}、山^{やま}はにわかにおこったように鳴^なり出^だし、

ブドリは目の前が青くなつたように思いました。山はぐらぐら続けてゆれました。見るとクーボー大博士も老技師もしゃがんで岩へしがみついていますし、飛行船も大きな波に乗った船のようにゆっくりゆれておりました。

地震はやつとやみ、クーボー大博士は起きあがってすたすたと小屋へはいつて行きました。中ではお茶がひっくり返つて、アルコールが青くぼかぼか燃えていました。クーボー大博士は器械をすっかり調べて、それから老技師といろいろ話しました。そしてしまいに言いました。

「もうどうしても、来年は潮汐発電所を全部作ってしまわなければならぬ。それができれば今度のような場合に

もその日のうちに仕事ができるし、ブドリ君が言っている
沼ばたけの肥料も降らせられるんだ。」

「旱魃だつてちつともこわくなくなるからな。」ペンネン
技師も言いました。ブドリは胸がわくわくしました。山ま
で踊りあがっているように思いました。じっさい山は、そ
の時はげしくゆれ出して、ブドリは床へ投げ出されていた
のです。大博士が言いました。

「やるぞ、やるぞ。いまのはサンムトリの市へも、かな
り感じたにちがいない。」

老技師が言いました。

「今のはぼくらの足もとから、北へ一キロばかり、

ちひようしたななひやく
地表下七百メートルぐらいの所で、この小屋の六七十倍ぐ
らいの岩の塊が熔岩の中へ落ち込んだらしいのだ。ところ
がガスがいよいよ最後の岩の皮をはね飛ばすまでには、そ
んな塊を百も二百も、じぶんのからだの中にとらなければ
ならない。」

大博士はしばらく考えていましたが、

「そうだ、僕はこれで失敬しよう。」と言って小屋を出て、
いつかひらりと船に乗ってしまいました。老技師とブドリ
は、大博士があかりを二三度振って挨拶しながら、山をま
わって向こうへ行くのを見送ってまた小屋にはいり、かわ
るがわる眠ったり観測したりしました。そして明け方ふも

とへ工作隊こうさくたいがつきますと、老技師ろうぎしはブドリを一人小屋ひとりこやに残のこして、きのう指ゆびさしたあの草地くさちまで降りて行いきました。みんなの声こえや、鉄てつの材料ざいりようの触ふれ合あう音おとは、下したから風かぜの吹ふき上げるときは、手てにとるようように聞きこえました。ペンネン技師ぎしからはひっきりなしに、向むこうの仕しごと事すの進すすみ具ぐ合あいも知しらせ
てよこし、ガスあつりよくの圧やま力かたちや山かの形かの変たずわりようも尋たずねて来き
ました。それから三日みっかの間あいだは、はげしい地震じしんや地鳴ぢなりのなか
で、ブドリのほうもふもとのほうもほとんど眠ねむるひまさえ
ありませんでした。その四日よっか目めの午ご前ぜん、老技師ろうぎしからの発はつ信しん
が言いって来きました。

「ブドリ君くんだな。すっかりしたくができた。急いそいで降おり

てきたまえ。観測の器械は一へん調べてそのままにして、表は全部持ってくるのだ。もうその小屋はきようの午後にはなくなるんだから。」

ブドリはすっかり言われたとおりにして山を降りて行きました。そこにはいまままで局の倉庫にあった大きな鉄材が、すっかり檣に組み立っていて、いろいろな器械はもう電流さえ来ればすぐに働き出すばかりになっていました。ペンネン技師の頬はげっそり落ち、工作隊の人たちも青ざめて目ばかり光らせながら、それでもみんな笑ってブドリに挨拶しました。

老技師が言いました。

「では引き上げよう。みんなしたくして車に乗りたまえ。」
みんなは大急ぎで二十台の自動車に乗りました。車は列
になって山のすそを一散にサンムトリの市に走りました。
ちようど山と市とのまん中どこで、技師は自動車をとめさ
せました。「ここへ天幕を張りたまえ。そしてみんなで眠
るんだ。」みんなは、物をひとつとも言えずに、そのとお
りにして倒れるようにねむってしまった。その午後、
老技師は受話器を置いて叫びました。
「さあ電線は届いたぞ。ブドリ君、始めるよ。」老技師はス
イッチを入れました。ブドリたちは、天幕の外に出て、サ
ンムトリの中腹を見つめました。野原には、白百合がいち

めんに咲き、その向むこうにサンムトリが青あおくひっそり立たつていました。

にわかにサンムトリの左ひだりのすそがぐらぐらつとゆれ、まっ黒くろなけむりがぱつと立たったと思おもうとまっすぐに天てんまでのぼつて行いって、おかしなきのこの形かたちになり、その足あしもとから黄きんいろ金色の熔岩ようがんがんきらきら流ながれ出だして、見みるまにずうつと扇形おうぎがたにひろがりながら海うみへはいりました。と思おもうと地面じめんははげしくぐらぐらゆれ、百合ゆりの花はなもいちめんゆれ、それからごうつというようおおな大おきな音おとが、みんなを倒たおすくらい強つよくやってきました。それから風かぜがどうつと吹ふいて行いきました。

「やったやった。」とみんなはそつちに手を延ばして高く叫びました。この時サムトリの煙は、くずれるようになってしまった。この時サムトリの煙は、くずれるようになってしまった。熱いこいしがばらばら降ってきた。みんなは天幕の中にはいって心配そうにしていますが、ペンネン技師は、時計を見ながら、「ブドリ君、うまく行った。危険はもう全くない。市のほうへは灰をすこし降らせるだけだろう。」と言いました。こいしはだんだん灰にかりました。それもまもなく薄くなつて、みんなはまた天幕の外へ飛び出しました。野原はまるで一めんねずみいろになつて、灰は一寸ばかり積もり、

百合ゆりの花はなはみんな折おれて灰はいに埋うまり、空そらは変へんに緑みどりいろでした。そしてサンムトリのすそには小ちいさなこぶができて、そこから灰はいいろの煙けむりが、まだどんだんのぼっておいりました。その夕方ゆうがた、みんなは灰はいやこいしを踏ふんで、もう一度いちど山やまへのぼって、新あたらしい観測かんそくの器械きかいを据すえ着つけて帰かえりました。

七 雲の海

それから四年の間に、クーボー大博士の計画どおり、
潮汐発電所は、イーハトーヴの海岸に沿って、二百
も配置されました。イーハトーヴをめぐる火山には、
観測小屋といっしょに、白く塗られた鉄の櫓が順々に建ち
ました。

ブドリは技師心得になって、一年の大部分は火山から
火山と回ってあるいたり、あぶなくなつた火山を工作した
りしていました。

次の年の春、イーハトーヴの火山局では、次のようなポスターを村や町へ張りました。

「窒素肥料を降らせませす。

ことしの夏、雨といっしょに、硝酸アムモニヤをみなさんの沼ばたけや蔬菜ばたけに降らせませすから、肥料を使うかたは、その分を入れて計算してください。分量は百メートル四方につき百二十キログラムです。雨もすこしは降らせませす。

早魃の際には、とにかく作物の枯れないぐらいの雨は降らせることができますから、いままで水が来なく

なつて作付しなかつた沼ばたけも、ことしは心配せず
に植え付けてください。」

その年の六月、ブドリはイーハトーヴのまん中あたりに
イーハトーヴ火山の頂上の小屋におりました。下はいちめ
ん灰いろをした雲の海でした。そのあちこちからイーハ
トーヴじゅうの火山のいただきが、ちようど島のように
黒く出ておりました。その雲のすぐ上を一隻の飛行船が、
船尾からまっ白な煙を噴いて、一つの峯から一つの峯へ
ちようど橋をかけるように飛びまわっていました。そのけ
むりは、時間がたつほどだんだん太くはつきりなつてしず

かに下の雲の海に落ちかぶさり、まもなく、いちめんの雲の海にはうす白く光る大きな網が山から山へ張りわたされました。いつか飛行船はけむりを納めて、しばらく挨拶するようには輪を描いていましたが、やがて船首をたれてしずかに雲の中へ沈んで行ってしまいました。

受話器がジーと鳴りました。ペンネン技師の声でした。

「飛行船はいま帰って来た。下のほうのしたくはすっかりいい。雨はざあざあ降っている。もうよかろうと思う。はじめてくれたまえ。」

ブドリはぼたんを押ししました。見る見るさっきのけむりの網は、美しい桃いろや青や紫に、パツパツと目もさめる

ようにかがやきながら、ついたり消えたりしました。ブドリはまるでうっとりとしてそれに見とれました。そのうちにだんだん日は暮れて、雲の海もあかりが消えたときは、灰いろかねずみいろかわからないようになりました。

受話器が鳴りました。

「硝酸アムモニヤはもう雨の中へでてきている。量もこれぐらいならちようどいい。移動のぐあいもいらしい。あと四時間やれば、もうこの地方は今月中はたくさんだろう。つづけてやってくれたまえ。」

ブドリはもううれしくってはね上がりたいくらいでした。

この雲くもの下したで昔むかしの赤あかひげの主人しゅじんも、となりの石油せきゆがこやしになるかと言いった人ひとも、みんなよろこんで雨あめの音おとを聞きいている。そしてあすの朝あさは、見違みちがえるように緑みどりいろになつたオリザの株かぶを手てでなでたりするだろう。まるで夢ゆめのようだと思おもいながら、雲くものまっくらになつたり、また美うつくしく輝かがやいたりするのをながめておりました。ところが短みじかい夏なつの夜よるはもう明あけるらしかったのです。電光でんこうの合間あいまに、東ひがしの雲くもの海うみのはてがぼんやり黄きばんでいたのでした。

ところがそれは月つきが出るのでした。大きな黄きいろな月つきがしずかにのぼってくるのでした。そして雲くもが青あおく光ひかるときは変へんに白しろっぽく見みえ、桃ももいろに光ひかるときは何かなにかわらってい

るように見えるのでした。ブドリは、もうじぶんがだれなのか、何をなにしているのかわす忘れてしまつて、ただぼんやりそれをみつめていました。

受話器じゆわきはジーと鳴なりました。

「こつちではだいぶ雷かみなりが鳴なりだして来た。網あみがあちこちちぎれたらしい。あんまり鳴ならすとあしたの新聞しんぶんが悪口わるぐちを言ういからもう十分じゅうぶんばかりでやめよう。」

ブドリは受話器じゆわきを置おいて耳みみをすましました。雲くもの海うみはあつちでもこつちでもぶつぶつぶつぶつぶつぶやいているのです。よく気きをつつけて聞きくとやっぱりそれはきれぎれの雷かみなりの音おとでした。

ブドリはスイッチを切りました。にわかには月のあかりだ
けになった雲の海は、やっぱりしずかに北へ流れています。
ブドリは毛布をからだに巻いてぐっすり眠りました。

八 秋 あき

その年の農作物の収穫は、気候のせいもありましたが、十年の間にもなかつたほど、よくできましたので、火山局にはあつちからもこつちからも感謝状や激励の手紙が届きました。ブドリははじめてほんとうに生きがいがあるように思いました。

ところがある日、ブドリがタチナという火山へ行つた帰り、とりいれの済んでがらんとした沼ばたけの中の小さな村を通りかかりました。ちょうどひるころなので、パンを

買おうと思つて、一軒の雜貨や菓子を買つてゐる店へ寄つて、

「パンはありませんか。」とききました。するとそこには三人のはだしの人たちが、目をまっ赤にして酒を飲んでおりましたが、一人が立ち上がつて、

「パンはあるが、どうも食われない。パンでな。石盤だもな。」とおかしたことを言いますと、みんなはおもしろそうにブドリの顔を見てどつと笑いました。ブドリはいやになつて、ぶいっと表へ出ましたら、向こうから髪を角刈りにしたせいの高い男が来て、いきなり、

「おい、お前、ことしの夏、電気でこやし降らせたブドリ

だな。」と言いました。

「そうだ。」ブドリは何げなく答えました。その男は高く叫びました。

「火山局のブドリが来たぞ。みんな集まれ。」
すると今の家の中やそこらの畑から、十八人の百姓たちが、げらげらわらってかけて来ました。

「この野郎、きさまの電気のおかげで、おいらのオリザ、みんな倒れてしまったぞ。何してあんなまねしたんだ。」
一人が言いました。

ブドリはしずかに言いました。

「倒れるなんて、きみらは春に出したポスターを見なかつ

たのか。」

「何この野郎。」いきなり一人がブドリの帽子をたたき落としました。それからみんなは寄ってたかってブドリをなぐったりふんだりしました。ブドリはとうとう何がなんだかわからなくなつて倒れてしまいました。

気がついてみるとブドリはどこかの病院らしい室の白いベッドに寝ていました。枕もとには見舞いの電報や、たくさんの手紙がありました。ブドリのからだじゅうは痛くて熱く、動くことができませんでした。けれどもそれから一週間ばかりたちますと、もうブドリはもとの元氣になつていました。そして新聞で、あのときの出来事は、肥料の

入れようをまちがって教えた農業技師が、オリザの倒れたのをみんな火山局のせいにして、ごまかしていたためだということを読んで、大きな声で一人で笑いました。

その次の日の午後、病院の小使がはいって来て、

「ネリというご婦人のおかたがたずねておいでになりました。」と言いました。ブドリは夢ではないかと思いましたが、まもなく一人の日に焼けた百姓のおかみさんのような人が、おずおずとはいって来ました。それはまるで変わったはいましたが、あの森の中からだれかにつれて行かれたネリだったのです。二人はしばらく物も言えませんでした。が、やっとブドリが、その後のことをたずねますと、ネリ

もぼつぼつとイーハトーヴの百姓の**ことば**で、**今までのこ**
とを話しました。ネリを連れて行ったあの男は、三日ばかりの**後**、**めんどうくさ**くなったのか、ある小さな牧場の近くへネリを残して、どこかへ行ってしまったのでした。

ネリがそこらを泣いて歩いていますと、その牧場の主人がかわいそうに思って家へ入れて、赤ん坊のお守をさせたりしていましたが、だんだんネリはなんでも働けるようになったので、とうとう三四年前にその小さな牧場のいちばん上の息子と結婚したというのでした。そしてことしは肥料も降ったので、いつもなら厩肥を遠くの畑まで運び出さなければならず、たいへん難儀したのを、近くのかぶら

畑へみんな入れたし、遠くの玉蜀黍もよくできたので、家じゅうみんなよろこんでいるというようなことも言いました。またあの森の中へ主人の息子といっしょに何べんも行つて見たけれども、家はすっかりこわれていたし、ブドリはどこへ行つたかわからないので、いつもがっかりして帰っていたら、きのう新聞で主人がブドリのけがをしたことを読んだので、やつとこっちへたずねて来たということも言いました。ブドリは、なおつたらきつとその家へたずねて行つてお礼を言う約束をしてネリを帰しました。

九 カルボナード島

それから五年は、ブドリにはほんとうに楽しいものでした。赤ひげの主人の家にも何べんもお礼に行きました。

もうよほど年をとっていましたが、やはり非常な元気で、こんどは毛の長いうさぎを千匹以上飼ったり、赤い甘藍ばかり畑に作ったり、相変わらずの山師はやっていましたが、暮らしはずうっといいようでした。

ネリには、かわいらしい男の子が生まれました。冬に仕事かひまになると、ネリはその子にすっかりこどもの

百姓ひやくしやうのようなかたちをさせて、主人しゆじんといっしよに、ブドリブドリの家にいえたずねて来て、泊とまって行いったりするのでした。

ある日ひ、ブドリのところへ、昔むかしてぐす飼がいの男おとこにブドリといっしよに使つかわれていた人ひとがたずねて来て、ブドリたちのおとうさんのお墓はかが森もりのいちばんはずれの大きな櫃かやの木きの下したにあるということを教おしえて行いきました。それは、はじめ、てぐす飼がいの男おとこが森もりに来て、森もりじゅうの木きを見みてあるいたとき、ブドリのおとうさんたちの冷つめたくなつたからだを見みつけて、ブドリに知しらせないように、そつと土つちに埋うめて、上うえへ一本いっぽんの樺かばの枝えだをたてておいたというのでした。ブドリは、すぐネリたちをつれてそこへ行いって、白しろい石灰岩せっかいがん

の墓はかをたてて、それからもその辺へんを通とおるたびにいつも寄よつてくるのでした。

そしてちようどブドリが二十七にじゅうしちの年としでした。どうもあの恐おそろしい寒さむい気き候こうがまた来くるような模も樣ようでした。測そつ候こう所じよでは、太陽たいようの調ちよう子しや北きたのほうの海うみの氷こおりの様よう子すから、その年としの二に月がつにみんなへそれを予よ報ほうしました。それが一ひと足あしずつだんだんほんとうになつて、こぶしの花はなが咲さかなかつたり、五月ごがつに十日とおかもみぞれが降ふつたりしますと、みんなはもうこの前まえの凶きま作わざを思おもひ出だして、生いきたそらもありませんでした。クーボー大だい博は士かせも、たびたび気き象しやうや農のう業ぎやうの技ぎ師したちと相あひ談だんしたり、意い見けんを新しん聞ぶんへ出だしたりしました。が、やっぱりこの

は、たいてい空気中の炭酸ガスの量できまっていたと言われるくらいだからね。」

「カルボナード火山島が、いま爆発したら、この気候を変えらるくらい炭酸ガスを噴くでしようか。」

「それは僕も計算した。あれがいま爆発すれば、ガスはすぐ大循環の上層の風にまじって地球ぜんたいを包むだろう。そして下層の空気や地表からの熱の放散を防ぎ、地球全体を平均で五度ぐらい暖かくするだろうと思う。」

「先生、あれを今すぐ噴かせられないでしようか。」

「それはできるだろう。けれども、その仕事に行ったもののうち、最後の一人はどうしても逃げられないのでね。」

「先生、私にそれをやらしてください。どうか先生からペンネン先生へお許しの出るようおことばをください。」

「それはいけない。きみはまだ若いし、いまのきみの仕事にかわれるものはそうはない。」

「私のようなものは、これからたくさんできます。私もよりもっともつとなんでもできる人が、私よりもっと立派にもっと美しく、仕事をしたり笑ったりして行くのですから。」

「その相談は僕はいかん。ペンネン技師に話したまえ。」

ブドリは帰って来て、ペンネン技師に相談しました。技師はうなずきました。

「それはいい。けれども僕がやろう。僕はことしもう六十三なのだ。ここで死ぬなら全く本望というものだ。」

「先生、けれどもこの仕事はまだあんまり不確かです。」

「へんうまく爆発してもまもなくガスが雨にとられてしまいかもしれませんが、また何もかも思ったとおりにいかないかもしれない。先生が今度おいでになってしまつては、あとなんともくふうがつかなくなるかと存じます。」

老技師はだまつて首をたれてしまいました。

それから三日の後、火山局の船が、カルボナード島へ急いで行きました。そこへいくつものやぐらは建ち、電線は連結されました。

すっかりしたくができる、ブドリはみんなを船で帰してしまつて、じぶんは一人島に残りました。

そしてその次の日、イーハトーヴの人たちは、青ぞらが緑いろに濁り、日や月が銅いろになつたのを見ました。

けれどもそれから三四日たちますと、気候はぐんぐん暖かくなつてきて、その秋はほぼ普通の作柄になりました。

そしてちようど、このお話のはじまりのようになるはずの、たくさんのブドリのおとうさんやおかあさんは、たくさんのブドリやネリといっしょに、その冬を暖かいたべものと、明るい薪で楽しく暮らすことができたのでした。

宮沢賢治大活字本シリーズ①
銀河鉄道の夜

2019年 10月1日 第1版第1刷発行

著 者 宮 沢 賢 治

編 者 三 和 書 籍

©2019 Sanwashoseki

発行者 高 橋 考

発 行 三 和 書 籍

〒112-0013 東京都文京区音羽2-2-2

電話 03-5395-4630 FAX 03-5395-4632

sanwa@sanwa-co.com

<http://www.sanwa-co.com/>

印刷／製本 中央精版印刷株式会社

乱丁、落丁本はお取替えいたします。定価はカバーに表示しています。
本書の一部または全部を無断で複写、複製転載することを禁じます。

ISBN978-4-86251-381-6 C0093

続刊予定

Sanwa co.,Ltd.



宮沢賢治再発見！

・賢治の物語を7つの色で分けました。藍色は銀河系、紫色は芸術、青色は賢治ブルー、緑色は自然、黄色は光、橙色は人生、赤色は愛。レインボーカラーで彩られた物語が始まる。 ・ユニバーサルデザイン仕様の大活字本・全文ふりがな付き

1. 銀河鉄道の夜

銀河鉄道の夜／グスコープドリの伝記

2. セロ弾きのゴーシュ

セロ弾きのゴーシュ／よだかの星／水仙月の四日／鹿踊りのはじまり／ガドルフの百合／かしわばやしの夜

3. 風の又三郎

風の又三郎／樺ノ木大学士の野宿

4. 注文の多い料理店

注文の多い料理店／ボラーノの広場

5. 十力の金剛石

十力の金剛石／めくらぶどうと虹／鳥の北斗七星／双子の星／猫の事務所

6. 雨ニモマケズ

雨ニモマケズ／どんぐりと山猫／度十公園林／なめとこ山の熊／イギリス海岸／フランドン農学校の豚／耕耘部の時計

7. 春と修羅

春と修羅

宮沢賢治大活字本シリーズ 全7巻

ISBN978-4-86251-393-9

A5判 並製 平均260頁 全7巻セット 本体24,500円＋税 各巻 本体3,500円＋税



9784862511836

ISBN978-4-86251-381-6

C0093 ¥3500E



1922077013501

三和書籍

定価(本体3500円+税)



法政大学教授
王敏 (ワン・ミン)

① 藍色（銀河）『銀河鉄道の夜』

銀河のほとりに立って見渡せば、「青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすゝきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立ててゐるのでした。」

『銀河鉄道の夜』

夜、空を見上げれば、天空の黒深い藍色に銀河は伸びて広がる大河です。

天と地の合流がみられる不思議な流れが絶えません。ジョバンニは銀河でかえがたい友情に出会っていたのです。カンパネルラよ、君はどこへ行ったの？